

『おにしやがんもろこしにっき鬼上官漢士日記』(おにしやがんもろこしにっき)

寛政八年(一七九六)十一月七日 道頓堀大西芝居 近松柳助・近松松輔 九冊

※底本に従って表記や改行を行った。文字譜は、とくに必要と思われるもの以外に省略した。

底本・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館(ニ10-00384)

<https://archive.waseda.jp/archive/image->

viewer.html?arg={%22subDB_id%22:%2277%22,%22detail_page_id%22:%221:4737%22,%22image_no%22:%221%22,%22kind%22:%220%22}&lang=jp

発端 朝鮮国咸鏡道の海辺

一冊目 名古屋陣所

貳冊目 筑紫の新御殿

三冊目 聚楽第

四冊目 四天王寺

五冊目 加藤正清の館 桃山の御所

六冊目 上福嶋の天満宮

七冊目 上福嶋の桶屋太郎助の住家

八冊目 京都阿弥陀が峯の耳塚

九冊目 東山の銀閣寺 福嶋正則の館 嵯峨野の葎の宿

1才

鬼上官漢士日記

作者 近松柳助 千葉軒事近松松輔

発端 朝鮮国咸鏡道の海辺

神亀よく夢を元君に見へ。予且が網を遁るゝ事

あたはず。されば三韓の皇屢々干戈を動かし。和兵に

当るといへ共我神国の猛威に及ばず。鮮軍宸に

利を失ひ。千里に満る鯨波何国。合戦ならざらん。

四面に敵を追まくり。猛虎のあれたる如くにて。加藤

1ウ

主計頭正清。数ヶ所の搦を攻落し猶奥深くうち

入しがとある磯辺に駒乗すへ暫し。休らひ居たりしが。浪

間を近く。漁船の風のあしなみ漕寄る。正清遙に見る

よりも。軍扇にて打招けば。はつといふたり白浪路。暫時に陸へ

漕つけ。あたふた上り両手を着。せんでうすはなんらのよう。

らいうちうくと頭を下れば正清莞爾と打笑ひ。ホ、汝を招は別義でもなし。鮮国においても。此所はいかなる国ぞ教へよと。

2才

尋に漁者は打黙き。則此所は咸鏡道と申。王城よりは乾の方。又是より真北に当つて遙に見ゆるは倭の国。今日の様なる

晴天には日本の富士山が。アレくとうど此ずんに見へ候と委しきおし多に眼を付。見やれば雲間にありくと。実三国にならびなき

富士の峯雪。正清横手をはたと打。唐土より我朝の富士を見る

事。諺に聞つるが今目前に此風景。春時の一興面白と。詠入たる折

こそ有。一塵調と吹風に。つれて立浪動揺しさも物凄き其水様。

2ウ

ハテ心得ぬ。一天くもらずして逆立浪に鳴動するは。いまはしき怪変なりと。かしこ

を屹詠むれば。峯雪忽奇雲に覆ひ。今迄有し富士山の跡なく。形は失にけり。清正大きに驚き。君の寓居を窺ひ四海を望む逆徒有と覚へたり。

今戦ひ半なれ共。打捨かたき御大事と。未然を覚る賢者の正清。いかに漁翁。

是より和国の道筋を。汝案内致せよと。せき立詞に件の翁。ホ、汝が忠

臣感ずる余り。イテ道しるべして得せんと。いふより早く白鳥と。姿は化して飛

去しはふしぎといふも余り有。正清くはんぎの思ひをなしハ、信すべし。神力應

3才

護の験は目前かゝる奇特を見るからは。片時も猶予致しがたしと。騎の手綱

をくりかけくかけ行向ふへ。討もらされの唐人原。そりや遁すなと追取巻。シヤ小ざかしき

蠅虫めら。一度に暇をくれんと。馬上ながらに大石を。手玉のごとく勇猛

力。群がる中へ投付れば。立足もなく軍兵どもむらゝばつと逃散るたり。

跡打詠。ハ、腕なし共に思はず隙入。イデ急がんと正清は。馬の頭を立直しけん

その難所いとひなく。一鞭くれていつさんに駒を。はやめて(三重)行空や

壹冊目

3ウ

広徳真異録に曰。蛇鼠は龍と成事あたはず。真柴大領久吉公。尤布衣

より出るといへ共。天性備はる大樹の威風。三韓征伐の御催し有て。名古屋の

陣に屯有。都聚楽の御殿より。大領御機嫌伺ひの使者として岸沢判官光

盛。森尾志津磨助吉晴御座の左右に相詰れば。軍鑑奉行芦田左衛門。其外

昵近外様のめん。威義嚴重に着座有。岸沢判官憚りもなく御前に向ひ。

時朝よりも申如く。真柴久次公三十余人の愛妾を拵へ。姪酒にふけり御身持放埒

殊に先年亡し武田勝頼が残党。爰かしこに徘徊致せば。都の守護甚覺

4才

束なし。御賢慮有て然るべしと。いはせも果す森尾志津間。ヤアだまり召れ岸

沢判官。跡かたもなき讒言。我君の目鑑を以て。帝都の守護御任せ有久次公。覺束なしとは御主君を愚昧なりといはるゝのか。ハ、ハ、ハ、貴殿の様に追従輕薄に云たい事も得いはず包隠すも事に寄。かやうの事は有の俣に申上るが四海の為さ。ヤア事を好んで四海の為とは何のたは言。ヤだまれ森尾。都の執権仰付られし。光盛が詞たは言とは過言で有ふ。今一言ぬかいて見よおと骨切て切さげん。シヤちよございなと双方が。鏝元くつるげしみ合ふ。大領暫しと押とぐめ。両人の4ウ

諍ひ互に一理なきにはあらねど。久次が行跡は此久吉が遠察に違はず。包隠す森尾が心底具に承知致しおれど。等閑ならぬ放埒惰弱。其方は片時も早く都に帰り。久次が首討て出すべし。急度申渡せしと。尖き御諍は綸言同前。ハツと計に吉晴は疊に喰付玉の汗。返す詞もなかりけり。心に笑の岸沢判官。空嘯たる表の方。加藤正清着船と知せの声を諸共に。鬼神を欺く智勇の良将。異国に英名隠れなき。鬼上官と呼ばれたる。主計頭清正。数多の下官を猿つなぎ。引立御前に打通れば。岸沢判官追従口。是はく正清公。長々外国の在陣御心

5才

勞察し入。目出たく帰朝致され。御寿きは此光盛が餽茶をていし。寸志の饗応仕らんと。いへど加藤はにか笑ひ。それ千万忝い。此正清茶の湯望にござらぬ。異国へ渡り数ヶ所の戦ひ。蔚山に籠りては百万の敵兵を引受。九死を出て一生にあひ。

嶋瀨が新塞に血戦して。其軍功並ぶ者もなく。然るに小西を初め何の功なき諸將の族。拔群の高名有と軍鑑に記し。功有を空しくするは奉行を預かる

芦田左衛門。心得がたき汝が胸中。證據の為に毛唐人を連帰たり。彼地の合

戦高名の次第。具にこれにて言上させ。高名帳に引合さん芦田左衛門是へ出よと。正

5ウ

清が御殿へひゞく大音上。ア、是々申正清様。此左衛門は異国より文通の俣。申上しに相違なし。憎いは注進の飛脚めら。急度吟味致さんと。命からく逃て入。正清は御前に向ひ。只今次にて承はれば。関白職たる久次公の御首を討べしとの嚴命。余りといへは御短慮千万今一応御賢慮を廻らされ下さるべしと正清が。詞の尾に付森尾志津間俱

に助命を願ひける。大領怒りの御声高く。ヤア詞をかへす不忠者。殊に軍れいを背きし正清我目通り叶はぬと御気色あらく大將は御座を立て入給へば。短慮の

正清ぐつとせき上。我君の御不興も佞人讒者の皆なすわざ。森尾殿いざ■

6才

れよ。此正清がお居間へ仕かけ置く訴詔仕らんいかにも一■も再■も御願ひ申上。久次公の御首は其時討供討ぬ共分別の仕らん。賢者を迷はず佞人共。終には天の御罪を請ん。ヲ、サ追付思ひしらくれんと。心を残し兩人は奥殿さして入にける。庭につらりと下官共めいゝ涙の顔を上。何と忠節。湖蓮齋。いかなる業か我々は此日本へ引渡され。繩目の恥の口惜や。唐に残りし女房子が。歎を思ひやらるゝと。面たれ落の

請■由しゆるで包し如くにて髭に涙のだら〜。果し泣入れ也。岸沢判官しろりと見やり。神国に敵たふ其身の不運。観念して■目でもこつき出せ。追付髭首

6ウ

さらへてくれんと。何か思案の有顔にしつゝ立て入んとする。下官の内より声高く。岸沢判官光盛待。其方一人が思慮を以て。此日の本を横領せんとは及ばぬ事。異国の良臣備倭將軍伯英。力と成て得さすべしと。胸の底意を見透す明察。きよつとせしが空笑ひ。ハ、ハ、ハ、己が命を助からんとさまゝの戲言。此光盛を反逆人とは。ヤア、あらごふな岸沢判官。宇治の方妊身有を幸に。久次に野心有とす■込。事を謀る汝が胸中逐一に承知せり。今より伯英合体の印を見せんと。いふより早く縄引切帶劔手練の稲妻早足。数多の下官左右瞬内に切たをす。見るより岸沢は心の笑連

7オ

伯英。ホ、面白し。其心底を見る上は。何をか包まん待望の一味合体。カ何かに付て邪魔に成加藤正清福島左衛門。討取手段は何と。其手づもりが廻り遠い。我年来習ひ覚へし人相の極意を以て。大領久吉が命数を老へるに。六十四歳相と、まる。又北條氏政は七十三歳。足利政左衛門は六十四歳。此三人が寿命を以て。事を謀るか肝要。則大領が一命は当年に相極まれば。きやつより先へ討て取。手段は斯と耳に口。スリヤ伯英には筑紫の旅館へ忍び入。雄龍の劔といふ物の。此陣所固めの出口を欺くは此鑑札と渡せは伯英打黙きホ、出来た。万事の手筈は書通を

7ウ

以て申越んさらばと。兩人が密事をこなたに聞取近習。イデ此通り注進とかけ出す襟がみ伯英が。くつと一しめ即座の最期。死骸に脇に心の笑。出行大胆。ひるまぬ顔色。胸に納めし石畳。別れ〜て出て行

式冊目

紅の。花に並よく名を呼で。緑の色も青柳に。心筑紫の新御殿。大領久吉公の妾。宇治の方の御物好き。君の凱陣松風の音通ふなる。奥殿は。琴の調べのやさしくも。秘中がお取次。御奏者役も媚きぬ。御妊身の寿きと。近国の大小名。使者の往来絶間なく。櫛の齒を引ごとくなり。御附人に加藤正清が

8オ

舎弟左馬助清明。榔下口より入来れば。男に目のない女中方。ばら〜と取巻てコレハ、左馬助様。日毎の御出仕御苦労に。存じますると口々に。挨拶するも恋路の橋下行水の心かや。わざとこなたは慇懃に。我君大領様御老年の上宇治様の御懐妊取分ての御悦び。夫故毎日〜此通りに。諸大名からの音物。御使者のばいかい。嘸。草臥でござらふと。いふ詞さへ愛を持。女殺しの目遣ひにじり〜傍へすりよる紅

葉。イヤ申左馬助様。わたしだあなたへお願ひの此文。ちよつと開いて下さんせと。差出す状は参らせ候。松かへはむつと顔。イヤ〜其お願ひは私が先。イヤ〜私じやと。我を忘れて

8ウ

秘共恋の先陣後陣の争ひ。裾もほらく頬赤共。南風にあふた魚市

の鼻向ならぬ匂ひなり。折からのさく高山玄蕃。くる共しらぬ秘共。左馬助は小隠れの。そつとはづして次の間へ。遁るゝ鰐の口まつ共。玄蕃を中に取付引付。あなたこなたへ引ぱり蛸。エ、何ひろぐとどつてう声。顔見て恠りなむ三宝。髭むちや殿の吹かへじや。これにお出と惣ぐが。とつと吹出し打連て。己が部屋へぞ。走行。跡に玄蕃が呆れ顔。何の事じや。生れてから此方。女に引はられた事のない身共。めんよふな事と思ふに違はず。おらが顔見て皆

9ウ

こそくとんと合点がいかないと。云つゝ目の付二通の状。取上て左馬助様まいるこかるゝ身より。扱は女共が清明にうつ惚。付文とはほてくろしい。時にやく■の神で敵とやら。恋の意趣有左馬助。自滅さす一つの道具と。胸に納めし佞悪の。友に染たる奴の国平。庭先へ忍び出て。玄蕃様是にお渡り。ホ、在瀧典膳殿の家来国平。何そ過急の用事でも有や。成程ゝ委細の義は此御

状と。差出す一通手に取上。つぶく読も口の内。何心無く綾織が明る襖の書院先二人か密事様子あらんと身をひそめ。伺ひ居る共しらさる玄蕃。差寄て小声に

9オ

成。宇治の方御懐妊に付御安産有やふと。当家の重宝雄龍丸の劔。上段の間にかざり有なれ共。左馬助が昼夜の勤番奪取に甚心勞。併ながら

此艶状を以て。きやつめを罪に落し其虚を伺ひ仕てやる工面。コリヤ斯と囁く密事呑込奴。然らば拙者は人の見ぬ間に。早くゝ仕済し顔に国平は又も

かしこへ忍び行。跡には独打黙き。企の臍をくゆらす煙立端を隠すお鳥

の。襖押明綾織か何気媚く振の袖見るよりそくゝ高山が。鼻いからしてほふと抱付是さ綾織殿。去迎はむごいぞや。是迄口説は幾度ぞや。けふは是非共色

10オ

よき返事。どふもならぬと懐へ差込手先振払ひ。イヤア玄蕃様。是迄色くとおつしやるは。御座興しやと存しましたに。ほんにゝ仁体にも似合ませぬと。やり込られても煩惱の。手飼の犬か。ちやうけかゝりしとろゝ目イヤもふ不作法も御仁体もかふ成てはいつそやくたいう。心の誓を頭はすコレ此起請とむりに捻込其折から。玄蕃様ゝ奥より召ますと。近習の声になむ三宝。よい事には寸善尺魔とむしやくしや腹。心残してぐはつたひし襖引立入跡に。エ、あた穢らしいと件の起請。投やるこなた左馬助。入かはりたる恋の渇。ヤア清明様かおなつかし

10ウ

やと寄添ば。なつかしいとは嬉しいが。只今の新作。玄蕃をとらへてホ、やつちやくとひそりの反太刀打込は。是そ口舌の発端也。そりや何いはしやんす清明様。今さらいふも。恥かしながら。過しお能の拝見にかい見初しが恋草の。何を種とや云よらん。便り求めて千束の文。嬉しいあなたのお返事に。一世の堅めの新

枕露の雫のかはく間も。なみ大体の二人か中。それに何そやあたし事。聞へませぬと取付て恨かこつそ可愛らし。何と答も左馬助。ハテ今のは私か出そこない赦してたもと袖口より。しつとしめたる手の内に。恨もとけて綾織はそんなら疑ひ

11才

はれたかへ。ア嬉しやと抱付折からお次に奏者の声。女院様よりの御使者と。しらせに驚く左馬助。花に障りのない内に。やいのくもつれ合ふ。恋のいかだにつなかれて。ぴつしやり立切中の間にぞ花のよしの山。盛りは少し過たれど。うつろはぬ色香も深き宇治の方。御跡に付随ひし高山玄蕃。其外近習烈を正し出向ふ程も媚きし。大内山の花よりも。外珍らしき月の顔いざよふ姿だけかくも。しづゝ入来る衛門の局。御添役には縣藏人付随ふて儲け有。座に至れる其粧ひ。宇治の方謹んで。程も遠路の都より御役義とは申ながら。御苦勞至極。御前

11ウ

様よりの御用の趣。自へ仰聞させ給はらば。有かたふ存しますると述給へは局■し■迄お目もし致さねど。私事は衛門の局。宇治の御方とはあなたよな。今日御前様よりお使に参る事外ならず先達て関白久次公へ。朝日丸の劔禁廷において。何者共知ず奪隠せし故。詮義有べきよし勅命下るとはいへ共。今に等■に相聞へ。父君大領の武威薄きにあたると。もつての外の逆鱗。去ながら其沙汰なきは公の政道。それに付上様此程より。御惱しきり成が時の転子奏し奉るは。徳有劔を以て加持し奉らば。御惱■あらんと申。去によつて大領御秘

12才

藏有雄龍丸の劔。禁廷へ差上られよとの御事辞退なく差上給は。上様いか斗御満足に召されんと。遺雲井の空■り心詞に。頭わせり。始終の様子宇治の方。一方ならぬ。帝様の御悩祈の為。雄龍丸の劔差上よとの御口上。則自預り奉れ共。即座のお請も女の■々。成程。此高山玄蕃逆も思案に落

す。勅答の其間。暫らく客殿にて御休息■ひ奉ると。申上れば縣藏人。おこそかならぬ一条なれば。尤■こそ有べけれ。局にも暫時の御休息。成程自もおもてなしに預らんか。わらはは是に縣藏人。そなたは次へと。差図につれて。ソレ近習

12ウ

の者御案内と。礼義も深き奥の間へ。宇治の御方諸共に■と入や入■に。兼ての。■饗応に照す■立かはり。入かはりたる御馳走役。お煙草お菓

子と持運ふ近習の中に左馬助。■ながらと差出す茶碗。思ひそ深き。湯初に。業平男うつとりと。見とる局。嘸お使者には御退屈。何事も籠略の段。真平御免下さるべしと身をへりくだり相述べ。是は徒龍の■の握加減。逆もならば方様の。愛らしい手元を拝見せぬが残り多いそふしてほんにほんぼに真実。底から。いとしばらしい。徒■の女たらし。馳走ぶりなら遠慮は入ぬ自

13才

が傍へ引付て。咄の伽を頼ますとにじり上りの濃茶の手前。帛紗さばき
の乱口柄杓のゑにし取たき風情。左馬助は飛のいて。是はめつそふな。恐多き
雲の上人。ふ骨なるあらくれ武士。お傍へ寄は不礼の至り。ヲ、かた。都に稀な殿
御ふり。濡ぬ先こそ露をもいとへ衛門が心の隠し哥。とふぞ一筆頼ますと。差
出す短冊左馬助。手に取上て。ム、恋とすへたる一字題腰折さへも詠じ得ぬ拙
者。哥の訳さへ覚束なし。此義はお赦し下さりませ。ヲ、訳を知ぬとはよそらしい。色をも
香を知人ぞ知。其人さへもなま中に。思ひ初しもあだ花に。咲す心か折
13ウ

取て。手生の花にする。墨の濃も。薄いも主様の心一つと打付に。色香乱て
見へにけり。襖のこなたに綾織がもゆるほむらに思はずも。我を忘れて走り出。
二人が中へ割て入。コレ申お局様。大事の使に來ながら。大それたといはふか。余りて顔が
詠めらるゝはいな。主の有左馬助様。よその花には成ませぬ。サアござんせ
と清明が手を取引立行先をふさぐ。衛門が恋の瀬戸あなたこなたと柵
の。もつるゝ拍子燭台の。灯ばつたり思ひの闇。探る手先に刀の下緒。しつとしめ
たる衛門の局。左馬助は綾織と心得一間へ行跡を。探りくるゝ綾織が。続ひて
14オ

奥へ行合の。襖をそつと上段に飾りし劔高山玄蕃。さし足拔足咽すんばい。油断
隙なき宇治の方御劔取替入給ふ。しらぬあんこう烏武士。してやつたりと盗取。
相図のしはぶき。奴の国平飛石つたひ。玄蕃様お首尾は。シイコリヤ声が高い。国平
近ふと声をしるべに指寄ば。ソリヤ件の劔しりもぬく。典膳殿へ。ナアコリヤ合点か。畏
つたと国平は表をさしてかけり行。サア是からは此盗賊左馬助めに好る趣
談と。わさと声を張上て。ヤアゝ近習のめんく灯早く。上段の御劔奪取て立退し
と。呼はる声に秘近習手燭てん手に宇治の方。蔵人も追取刀。此体
14ウ

見るより扱こそ。太切なり御劔盗取たる曲者遠くは行まし侍中。手分して
詮義召れと縣が下知。玄蕃制して。イヤゝお騒ぎ有な蔵人殿。盗賊は則
拙者召捕てござる。只今御前でめんばくさせんと。以前の付文取出し。宇治の
方の御前にさし出し。上段の間にかざり有し雄龍の劔。紛失の其場所に
落散し其二通上書の名当は左馬助。早く御詮義有るべしと。鼻息隠す
俊舌に宇治の方打笑給ひ。早速の働き出来た。紛失の場に落散し
は天の呵らしむる君の御罪。ヤアゝ左馬助清明と。御気色かはる御声に。今は忍び
15オ

ず左馬助面目なげに一間を出。何事も拙者が誤り申訳には斯の通りと差添
に手をかくれば衛門の局走り出。押とゝむれば蔵人声かけ。ヤ僂忽なり。劔紛
失を只不調法成と腹切計が。言訳には成まい。ヲ、サ此玄蕃か主人に成かはり。急度
拷問加へねばならぬ。清明覚悟仕てそこへ直れ。イヤ先太刀の詮義は跡へ廻し。御家

の掟不義の政道糺さにやならぬと。理の当前に宇治の方。心の当途。其不義の政道は自が糺してくれん。ナニ玄蕃其一通読上い。ハアイヤもふく。前から読たくて。手足がぞく。さらば読上申さふと。己が手跡と知らぬが高山押ひらき。エンく起請文

15ウ

の事。ム、扱もほてくるしい。起請文と書てござります。何じや一其元様に惚れて候故押付ながらどふぞく女夫になつてヤ、コリヤ違ふたと悔りはいもふ。サア跡を早ふ読や。イヤもふ此跡は読に及びませぬ。ヲ、其文の名当は。綾織様へ玄蕃と書て有ふがな。サアそれは。儕が科を押包詮義立する。横道者。心得がたきは今宵の時宜と。誠

の劔は自がとくより是に守護せしぞや。スリヤアノ劔は贖物とや。そんならさつきの。何がどふした。イヤサアさつてもよくした物でござります。ホンニそれ共知ずあほう鳥。埒に放られし空気侍。御劔恙なき上はこの場を赦すと。宇治の方。よどまぬ吉粹

16才

情の詞。イヤたまらぬと立上るを。縣が早足椽より下へ踏落され。恐れほうくひれ起て。立足もなく逃て行。折もこそ有御注進と呼はりく。森本覚兵衛広庭に大

息つぎ。扱も大領久吉の御陣所へ。降人と偽り毛唐人の曲者。君に近付しいし奉らんと。火炮を以て既に計義をなさんとせしが。尊運の我君御命恙なく候間。御悦び然るべしと。言上すれば。宇治の方清明始安堵の眉。開くる尊運。ハテ口惜き次第やと。今迄柔和の縣藏人忽無念の其面ざし。傍成劔取よこ見へしが局を小脇に飛鳥の

かけり前なる井戸へ飛込だり。人々是はと驚く中森本せいして。此空井戸は裏

16ウ

門へ拔道人数を廻し召捕ん。清明様には宇治様の御守護有て然べしと。申上れば左馬助皆く奥へ入給ふ。イテ曲者めと森本が。かけ出す向ふへ。どつこい。そふはさせぬと一味の賊徒。得たりと抜つれ切てかゝるを事共せず請つ流しつ手練の森本。切先下りに切まくる。咽もひいゝ雑人原。立足もなく逃行を猶奥。深く追てゆく

春の夜の。風にそよきて。乱れ合ふ。芦間かき分押分て。姿は誰と白浪の。■を誘ひ忍び出。相凶の呼子友子鳥。爰かしこより。頭はれ出。コリヤ。何皆の者言付置た用意の駕。サア妹そちは一時も早ふ隠れ家へ。そんなら兄様私はお先へ。コリヤ随分

17才

ともに人の見ぬ間に皆の者。お頭跡から戻らんせと。駕を追立足早に。元来し道へ引かへす。跡見送つて件の劔。押いたゞき。どりやそろくへ行ふかと歩むこなたの。芦萱の。風も吹ぬにざはく。ぞつと身の毛も忽に。炎くたる。猛火の中に声ありく。ヤア、成宗皇帝の忠臣。備倭將軍伯英とゞまれやつと呼はる声。胸にぎつくり思はずも。振返り見る芦間より。怪しき形相忽然と。イむ有様。さしもの伯英暫し。猶予居たりしが。扱は我をまどはさんと及ばぬ狐狸の変化ならん。サア。化の皮引ばげと。嘲笑うへはホ、思ひも寄ぬ互の参会尤の偽念。我は昔高麗たりし時明宗皇帝

17ウ

に仕へ奉りし。征東大將軍王仁第三の末流魏馬伯圓と言し者也。ム、其伯圓公こそ我家の祖たる御方。■一千余年の星霜をふりし。粟散片地の此國にて。姿を見へ給ふは旁以て不審し。ホ、其一言然れ共。神皇我國をおそひ。三韓王は日本の犬なりと石面に彫付。長く國の恥辱を残す其無念止事なく。何とぞ日本をくつがへし先祖の恨を晴さんと。思ふにかひなく事ならずして。空しく成其一念。鬼と成て此土を去ず。然るに又もや婢賤の奴久吉めが為に今韓國を乱妨す。遺恨重る折に幸。忠臣の志厚く。此國に渡り健気にも謀叛

18才

の思ひ立。此一巻こそ秘藏の妙法今より汝に授け得させ。影身に付そひ力とならん。心安かれ伯英と。聞より大きに恐れ入。コハ有がたき御賜と。押いたゞき。年月重る御怒り一時に散ずる術こそ。某が手裏に有。又此一巻こそ。龍に翅を得たるも同然。瞬くうち久吉が首。梟木の印となさん魏馬將と。いさみ立たる其骨柄実。韓土に名を得たる。義心の程ぞたぐひなき。ホ、いさましし悦ばし。我望たんぬれば。対顔是来帰去退くと。いふ声ともに伯圓が姿は。きへてぼうせんたる。伯英

18ウ

奇異の思ひをなし。我忠臣を感じたまひ靈尊の厚德暫時も猶予は本意にあらずと。くだんの一巻押ひらき。とつくと見て横手を打。実妙々の此幻術ハ、有がたし忝しと。悦び余る高笑ひ。是はしたり。思はずしらず独言。どりやまからふと一巻を。納る大胆行先を。ふさぐ組子のめんぐが。曲者やらぬと追取巻。じろりと見やり唱ふる秘文。アツと一同にたをるゝ組子。にたりと詠め。行過る。後へ森本覚兵衛が。取にかゝるを振ほとき。曇る霞か幻術に。形の水の月代も覆ひ。かくして(三重)行雲に

19才

三冊目

和君御國へ貢物。やがて捧る朝鮮國。扱風景は中々や。口に一ぱいほうばつて。葦ならべし都の竈。其数凡九億八万七千六百五拾三軒。彼玉殿金台の。棟の梁たらゝ。五歩に一樓十歩に御亭。お茶に休み所。扱々結構なる夜の物。錦織物綾緞子三千人の宮女達前や。後に置火燧夏は。涼しき■へ。笙ひちりき。管弦を奏し御床入其睦言に。もんごんぞくごん。やんれめんどんやそりくさんのしふちやにの。いんもりちうとう。かけんすへ是唐人の寝言也。ヨイヤと一同に。誉る高声武兵太弁治。扇遣も

19ウ

鼻高く。何と女共。我々が舞の一曲どふだく。イヤもふお二人様の隠し芸。どふもいへた物じやござんせぬと。禿の文字野が口まつに。仲居の小枝しやくり出。残り多いは肝心の太夫

様にお目かけぬが残念はいなア。誠に小枝が申通り。肝心の太夫主きつい延引。嗚我君にもお待兼。武兵太弁治。ソレ早く是へお供申せと。何がな前追従に。はつと

二人は立上るを。久次公押とゞめ。ハテ扱性急な者共じや。父大領は異国征伐我等は留主守。所で日本風取置て此通り唐のまねび。なりや太夫か身仕舞もどふ

で隙が入であるふぞい時に兩人が今の一曲■だ出来た。当座の紙花遣はすと。

20才

料紙取寄さらすと。一筆書て。コリヤ典膳是を二人の者へ遣はせと。仰に典膳取次は。武兵太弁治は押戴きひらき読で。ナニく壱万石の御加増とな。武兵太殿弁治

殿是は夢では有まいかと。二人はぞくく悦びの折もこそ有。聞ゆる唐楽。アレクアノ楽は太夫様のお出のしらせてござんせうと氣の付禿。ヲツト合点我々が。いでお

迎ひにと武兵太弁治きをひかゝつて走行。見ぬ唐土の貴妃君も及

びたへなる勝姫君。遠山の眉の堆く。歩み。くるのはの取なりも。唐と倭を

踏分し外八文字。しなやかにこぼれかゝりし風情なり。典膳はあふぎ立。やつちや

20ウ

お見事去ながら。次大尽のお待兼。何故遅い御■でござりましたぞ。サイナア私も心はせくけれど。上の衣じやの上帯のと。馴ぬ衣装で思はぬ隙入。漸今

で。こんたるきんないとらやアと。いふて次出す唐音も。時の一興大將は。猶も御機嫌よし■の房。引舟役のしこなしぶり。勝姫君を伴ふて。御傍近く座に付は。

久次公は余念なく。コレ勝姫いかふ待せて置きやつたの。其かほりには今宵は一泡吹せてくれん。時に兩人の芸者共は。いづくへ往たぞ。恋人への慰みに。何ぞ一さし

コリヤ典膳。兩人のかほりに其方。何なりと早ふ舞く。是は又迷惑千万

21才

此典膳■様な事は大不調法。余人に御意を下さるへしと。云せも果ず氣早の久次。

ヤア奇怪なる一言。我命を背く条。只一討と御佩に。手をかけずんど立給へば。

ヤレ匱忽なり暫くと。欠出る常陸守。御手に縋り押留れば。ヤア匱忽と

は何が匱忽。我命背きし在瀧典膳。手討にするが何とした。イヤ御手討

はおとゞめ申さぬ。是敷の事に一人たる御身の御佩刀を穢し給ふは恐れ有。

近習小性に命ぜられても苦しからず。先お静りあられよと。申上ればにつこと

笑ひ。遺の老人よく云た。其義ならば常陸頭。其方に申付る。身が目通り

21ウ

て討放せ。ハア畏り候へ共。御殿に置いて血汐を穢さば恐れ有。拙者が宜しく計ひ申さん。イヤナニ典膳。サ次へ来やれと重成が。詞に典膳打黙き。一間へこそ

は入にけり折から奏者の声として。御母公蘭の方様より。御内意のお使者也と。しらせに程も長廊下。しづゝ入来る其人は。森尾志津磨が妻の巻筆。

■には足で憎からぬ。姿の。女松相生に二つ三つ四つ越の谷が。弟嫁に劣じと行義。正しく座に着ば。久次公会釈有。母君より御内意として。志津磨が女

房卷筆。今一人は三浦帶刀が妻の越の谷。使者の役義も合点たり。此頃

22才

より聞飽ておる例の諫言。聞には及はぬ酒でも呑で早帰れと。裏を打たるお

詞を。脇へこかして越の谷か。ホ、是は又先くりな君のお詞。我々今日。母君様のお使に
参りしは三つのお尋。恐れながら一々に。御返答承はつて帰れとの御詫ム、此久次

にお尋とは。いぶかししと。仰に猶も恐れ入。サア卷筆様一つのお尋をマアお前から。いへ

く兄嫁御をさし置て。弟嫁のわしが出過た。ハテ何の夫に遠慮が入事。そんなら私か

お尋をと。こはくながら手を突て母君様の仰には。先達て禁庭より。詮義仰

付られし朝日丸の御劔。其俣に詮義もなく。昼夜を分ぬ御酒宴乱舞。其上

22ウ

三十余人の女中を集め。色に溺れし御身持。是第一の御尋。サア此跡は越の谷様アイく
と。差寄て。此義に付て。父君大領様の御憤り大方ならず三つには今度異国の賊

徒。此土へ渡り。忍びくに謀叛の与力をかたらふ由。専ら衢の風説。かゝる大事を聞

ながら。色と酒とに日を送り給ふ。君の御所存。心得かたきケ条の三つと。ケ様に申せ

は使者の表。何卒御心改給ひ。世に清君の御名を上させ給はる様恐ながら

我々迄お願ひ申上ますと詞も揃ふ。二人か忠節。久次公につこと笑ひ。扱々何事

と思ひしに。母君のいらざる心勞。四海の政務を掌に握る某。穴程の弁へ

23才

有まじと思し召てか。立帰つて此通り。返答致せ。ム、左様の御心なるあなた様が。色に溺
るゝ御身持は。ヤア奇怪なる尋事詞返さば真二つと。例の短慮に逆立腹。

見る目せつなき勝姫君。思ひ極し御覚悟。なむあみだ仏と我君の。御佩刀に手

をかけ給へば。久次公押留給ひ。ヤ勝姫何故の自害ぞと。仰に姫は御声をやゝ打

守り。兎にも角にも自か。此身を劔の霜とせば。せめて少しの申訳。色と酒と

に溺れしと。御身に悪名付たるも。皆自が科ならずや。唐の教の故事

にも。人の謗を残したる。帝の数の其中へ。我日の本の大将も。若や残さば此身

23ウ

の恥死て。操を立るなら。父上にも母上にも。少しは不便と思されん。どふぞ死して。

給はれとかこち歎かせ給ふにぞ。卷筆越の谷更に。御心根を思ひやり。俱に涙

を添にける。ヤア愚なり勝姫。四海の政道預る久次。汝如きが生死にはかゝはらじ。

いかに兩人。無益の舌の根動かさず共。早立帰れと言捨て。しほるゝ姫を引

立ゝ帳台深く入給ふ。二人は跡にうつとりと。翹もがれし心地して暫し詞はなかりしが。

越の谷は心を定め。此上は我君のお手討に成進も。御本心を聞ぬ内。母君

への申訳が。ござんすまい卷筆様。成程。けふの役目を仕損じては。銘々夫の恥

24才

辱となる。押て御前へ。サアござんせ。アイく合点と。打連立。お主思ひは相嫁同士

奥殿さして入にける。人なき隙を武兵太弁治。うそく窺ふ書院先。同腹中

の在瀧典膳。互に黙き差寄て。犬嶋武兵太最上弁治。兼々心を合す。岸沢公より御頼みの一品。兩人に申付置しがサ、首尾はどふしやと囁けば。犬嶋がでかし顔。そこらはぬからぬ太政官の御正印。まんまと盗んで則是にと手に渡せば。とつくと改め。ハ、ハ、出来た。此御正印が手に入は。軍勢催促は思ひのまゝ。朝日丸の御劔は。岸沢公へ先達て渡し置。此一品も兩人の働きにて。岸沢公
24ウ

へ一時も早く差上召れ。事成就せば二人共コリヤ一國一城の国の守。スリヤ差詰あなたは四海の執権。時に底意の知ぬは三浦常陸頭。此方の味方に付る御手談はな。

夫も大かた工夫致し置たれ共。うかつには口外ならず。ハテ扱いらざる事に御心配。此弁治が働にてたつた一討。コリヤ声が高いサ夫は格別。只今の一品。一刻も早く彼方へ急げ。に兩人が。駈出すこなたにどつさりと響く筒音武兵太弁治。胸骨一度に打拔れ。くすぼり返つて死てげり。コハ何者と驚く典膳。見返るこなたの茂みより。ヤレ騒がれそ在瀧殿と。鉄砲引提三浦重成。庭木の影より頭はれ出れば。典膳くはつ
25才

と眼をいからし。扱は我々が失望をけどり。兩人を手にかけてしよな。もふ此上は破れかぶれと刀の柄に。ヤレ鈍忽なり典膳殿。今兩人を仕留しは則岸沢公へ合体の金打。ナニ兩人を打殺し金打とはな。ホ、ケ程の太義企つるに。青侍の腰抜共。力と頼むは危ふし。

此御正印こそ重成が。岸沢殿へ手渡しせん。スリヤ貴殿にも一味連判に。ハテ念には及ばぬ義は金鉄。ガ帝守護たる錦の御簾。紛失なれば是一つに当惑せり。其御簾

は某が得より奪ひ。所持致し罷有。夫は手番ひ極上々。ドレ拝見と立寄ば。何

心なく差出す御簾。押戴いて懷中に。しつかと納し顔付を。いぶかしげに打守り。ヤア
25ウ

扱は其簾を奪取んが為。コリヤ一番典膳をやつたるよな。ホ、速の典膳よき推量。

最前汝が命助け置たは。此御簾を奪返さん為だはい。アノコナ大馬鹿めがハ、ハ、と云れて典膳歯がみをなし。エ、計られしか残念や恨の刀受取と。切てかゝるを受流し。

抜合せたる上段下段。奥は酒宴の打囃子。こなたは修羅の白刃と白刃。老人

ながらも重成が。手練の切先するどくも。ひらりと見へしが此世の暇。体は二つに無慙の最期。何角心に黙きて。庭のしげみへ件の死骸。蹴やり蹴飛しゆう

くと。登る書院の。広縁伝ひ襖。引立入にける。院に其日も暮近くいと。思

26才

ひやますらをの。やたけ心も弦延て引ぞわづらふ兄弟が。胸に幾重や隔

の襖。明て出るも一思案。同じ思ひに相嫁同士。一間をそつと出会頭。ノウ待兼しと越の谷巻筆。夫々の傍に寄。大領様より密の御召と云。どふやら濟ぬお顔

持。様子を早ふお聞せと。案じる妻の顔打詠め。ホ、氣遣ふは断り。主君

の行跡一々大領の御聞に達し。御憤り以外の外。三十六人の女中を始め。久次公諸共に首討て差出せよと厳しき御説。則此志津磨の助は儉使の役。そん

ならお前が儉使の役目を。ホゝいなみがたき父君の御詫。兄帯刀殿も某も

26ウ

今宵にせまる忠義の切刃。兄者人もふ此上は親人に対面し。枕をわつて我君の申披きを。成程某連も其心。然らば一所に。イザ弟来れと兩人が。入んとするを越の谷押留。其義に付ての御相談なら。もふよしになされませナア巻筆様。ヲ、そふでござんす共。けふ私らが此御殿へ参りしも。母君様よりのお使。様子といふは久次様への御異見の為。御聞入なき故に舅御様へ其様子。お咄し申せど空吹風。ム、スリヤ親人には承引なく。君の大事を余所に見て。ヲ、余所目もよそ目我子をもとも思はぬお心。フウ忠義一途の親人と。思ふに違ふ御心底。とはしらずして今迄

27才

も力と思ひ心の頼み。弟兄者人。ハア、斯迄御武運拙きは。いか成神の御罰ぞと。互に涙はらゝ。我身にかゝる二人の妻。夫の心察しやり。俱に涙に暮ゐたる。氣を取直し帯刀は。いかに弟。所全悔ひても返らぬ事。もふ此上は我々兄弟心を合せ。久次公を御供し。いかなる山林にも身をかくし。時節を待て主君のお詫。実尤の思ひ立。いざゝせ給へと兄弟が。つと立上り身拵へ女房も。かいくしく帯引しめる後の方。そこ動くなと声をかけ。襖あらはに父重成。追取刀に立出れば兄弟左右に詰寄。主君を助奉る我々が一期の忠。何故

27ウ

父には御とゞめなさるゝや。但し主君を討奉る御所存成か。サ、承はらんと兄弟が詞尖に云放せば。重成二人をはつたとねめ付。ヤアこしやく成尋事。父に背くを天に背くといふ事。うぬらも常々よく知つらん。主君ながらも久次公は。非類なき極悪非道。コレ天の責る所なれば。所全存命思ひも寄ぬ。うぬら連もまづ其如く。此親の心に叶はぬ今日より七生迄勘当じや。サア勝手次第に立去と。尖き父の一言は。道ならずとは思へ共。何と答もあら涙齒をくいしげる計也。越の谷巻筆涙ながら。いかに親御のかうけじや連。忠孝あつきお二人様。何誤りの御勘当。あ

28才

まりと申せばお心強ひ。草の葉を這虫だにも子を憐むは世の習ひ。お胴欲なお心と。恨み歎くも道理なり。ヤア二人共何ぐど。忠義には親をも討。父の心にそむく共御主君の御供し。イザ立退んとつ立兩人。透さず父は衿がみ掴みくつと引すへ。ヤア揃ひも揃ひしコナ狼狼者。嘸不道なる親なりと。心の内には疎みつらん。コリヤ泰山を脇挟んで北海へ越る共一旦云出せし詞変ぜぬ重成。スリヤどふ有ても御勘当とな。くどい。勘当の水土産に心を込しコリヤ。此扇。再び逢ぬ筈と思ひ。持てうせふと二本の扇投出せば。手に取上て兄弟が。

28ウ

恨めしげに声ふるはせ。扱は親人には御主君久次公を。討奉る御所存よな。おんでもない事。鞠の御会を幸に。だまし寄てたつた一討と。聞て驚く嫁よりも。帯刀志

津磨は齒がみをなし。親に背かば天是を罰するとの仰に引かへ。三代相恩の御主君を。臣下の身として。ヤアこしやくくなる一言。細言云々と筐の扇。要を解か。但し。又親背子背を二度磨き廻り扇の此賜。コリヤ性根を付て兄弟共。早く此場を出てうせうと。尖き詞の其中に籠る一句は親の慈悲。兄弟互に顔見合せ心に黙きしほくと。館を出る夫と夫。女心の跡や先思ひ

29才

悩みて立兼るを。にらみ付たる。舅が皺面。是非も泣目を押かくし。落る。涙は袖の上衣紋。ながしの(三重)鞠の暮四本のかゝり枝たれて。築地の。上の木の間もる。鞠の高低雲に入。姿は誰と見へね共。声もありく沓の音。暮一入の風情なり。森尾志津磨の助が妻の巻筆。夫の忠義も父上の非道に空しく成のみか。果は親子の縁も切。悲しき中にかいく敷。何卒主君を盗出し。夫の功にせん物と腰に一こし連にも。築地のかげに忍び奇。窺ふかしこに高くと。ありいありやの声々の。中に主君のおはするか。早ふ様子をおしらせ申密に落し

29ウ

参らせんと。思へど癖の内と外心悩みて。イむ所へ。兄嫁の越の谷が心は同じ夫思ひ。走くるく思はずも。見合す顔に。ヤアおまへは巻筆様。あなたは兄嫁御。爰へはどふしてござんした。どふしてとはお前の心に問しやんせ。私にしらさずお前の抜がけ。久次様お供して。お連合の志津磨助様へ手渡しし。兄御帯刀様に鼻■さそふとはまんかちにござんする。ホ、コリヤおかしいはいなア。わたしが夫を我太切に思ふ故。私で我する事。兄嫁がい云しやんすなど。ずつかりいへば越の谷は気色をかへ。コレ巻筆様。イヤ巻筆殿。兄嫁かいの何の連余りな耳こすり。お前が夫太切

30才

なら私逆も同じ事。手柄は仕勝。お先へ参ると云捨て。行をやらじと支ゆる巻筆。裾もほらくから紅ひ水入ずの相嫁同士汗に。流るゝ紅粉白粉。脛もあらはにいどみ合。心増りの越の谷が。かよはき手先で真の当。うんと計に巻筆がたぢくくとよろめく隙。こなたの松が枝手がりに。さくがにならぬふるまひは。いと危ふくも女の一念。難なく築地を乗こへたり。漸氣の付巻筆が。あたり見廻し。ヤア先越れしか口惜やと。立上れ共急所の痛み。足踏しめてそふじやく。久次公の御寝所は乾の隅。水門口より安々と劣りはせじと一散に転

30ウ

つまるびつ(三重)行足も。空定めなき。宵闇に星の明りは有ながら。心は闇の方角もしらぬ。築山庭木のしげみ。そこよ爰よと巻筆が。忍び込たる飛石伝ひ。一息ほつと月ならで。燈しのかげに有々と。障子に移る影法師。見ればあへなや三十余人の女中がた。席をしめ居ならび最期の称名ばつたり。ばさりの音に連。血煙忽ち露の身の。跡はかなくも灯火と俱に消行真の闇。身もわなくとふるはれて我も消行思ひなり。チエ、胴欲な舅御様。罪

科もなき人々を。いたはしの有様やと恨みかこちし一人言。爰に呵責の■ならぬ
31才

常陸頭重成。障子をさつと押開けば。御いたはしや久次公。勝姫君も諸共に。常
にかはりし白小袖。御目を閉て座し給ふ。常陸頭謹で。臣たる身として主君に
生害すゝめ奉るも■命■なく。只此上は清の御最期然るべしと。舅
の声に驚く巻筆。ヤア夫にござるは舅御様かと走躰きかけ寄て。エ、
お前はのふ。三代相恩の御主君の御命。見殺しにする無得心。たらはぬ女
の心でも。どふぞお助け申さんと。思ふが道で有まいか。エ、胴欲なお心やと。恨
歎けば多せ笑ひ。ハ、ハ、ヤアだまれめらうめ。そちや勘当受し悴が女房。及ばぬ

31ウ

事の上まい言。悪くしやはるが最期。三十余人の女原がよい手本。細首を
打放されぬ其先に。サ早く帰れ。イザ我君様には御切腹。時刻延引仕る
と。最期をすゝむる重成が。詞に実もと久次公。打うなづきて九寸五ぶ。逆
手に取て我と我。腹にがいと突立給ばおくれじ物と勝姫君。尋常に
座をしめ手を合せ。重成早く介錯をと。其一言か筐にて。首は前に
ぞ落てけり。もふ是迄と巻筆が。俱に自害と見へければ。ヤレ早まられ
など木影より。出るは誰と巻筆が。すかし見れば三浦帯刀。ヤアあなた

32才

は兄御帯刀様。私が自害何故お留なされしぞ。ホ、其貞節のいたはしき。せめて今
端に夫婦の名残。惜まれよやと兄弟の。妹背を思ふ情のあかり。大■ならぬ
志津磨助腹一文字にかき切たり。見るより巻筆狂気の如く。手負に縫り声
を上。久次様の御切腹と思ひも寄ぬ夫の自害。定て深い入訳が有ての事で
ござりませう。コレ申舅君。様子聞せて給はれと託ち歎けば志津磨助。苦しき
息をほつとつき。ヤア見苦しき女房。志津磨助が此切腹はな。最前親人が扇の
謎にてよく知たり。今宵につゝまる我君様の御命。兄帯刀殿へ此身ががはりを譲

32ウ

ては本意ならずと心の覚悟。是といふも皆親人の御情。とはいふ物のいたはしきは
越の谷殿。勝姫君の御身がはりと。首差延て健氣の最期。兄者人の御心
底。察しやらるゝと跡は涙の玉霰。巻筆も声を上。斯いふ事とは露
しらず。最前も云争ひ。嘸はしたくない女じやとおさげしみが。エ、恥しい。聞ば聞
程情ない姉様共母様共。思ふお方のお命にかはらで残る其上に。二世の夫
を先立てどふマア生て居られふぞなぜ女房よかうじや。お姫様のお命
にかはり死ねとつい一言。いふて給はらぬ。舅君にも兄御にも。

33才

聞へませぬとくどき立かつぱと。伏て泣沈む。目をしはたゝき父重成。ホ、其恨
は去事ながら。弟志津磨が此切腹。我逆も思ひも寄ず。次男なれ共森尾

主膳が養子となれば。忤ながらも忤にあらず。最前兩人を勘当と我強くいひしは心の謎。二本の扇の其一つは兄帯刀へ御身代りと。かけたる一句は養父主膳か亡魂へ立たる義理。健気にも汲分て。兄にかはりし志津磨が最期。取分不便は嫁越の谷。夫の命の恩返しと。弟嫁にかはりたる義理を思ひ最期にて。立る互の道筋は。二筋三筋にかはれ共。只一筋の忠孝に。

33ウ

とゞまる二人か命ぞや必ず悔な歎くなど。口にはいへど恩愛の涙は胸に湯玉せり。心を汲て三浦帯刀。最前親人が我々へ勘当の印込給はりし二本の扇弟が扇面には幾千代祝ふ舞鶴の。しかも小鳥に餌を飼体又某か

扇には。五月雨や池の真菰に水こへてと。殿上人に読かけし彼頼政が

口号。ハ、ア扱は久次公の御命に。かはれと有父の謎。君に面ざし似たるとも。

引ぞわづらふ御身かはりと心の覚期。弟に先越れし我残念。去ながら我に

まさりし女房が勝姫君の御かはりに。死たるは女の鑑。我への操ホ、出かしたな

34オ

忠孝はづれし此帯刀。腹かつさばき此場にて。死るがせめて親夫への言訳ぞや。

ヲ、私進も同じ事。せめて冥途の道連にと。磨き合たる。心の覚悟。ヤレ籠

忽なり兩人今其方が愛果なば。兄弟夫婦の義は立へきが忠と孝とに

弥聞し。御家の■は岸沢判官。彼に一味の典膳が盗取たる御正印まつ

た錦の御簾も奪返して則是に。此二品に忤と嫁が首を添。大領へ差

上事納るは重成が胸に有。今より汝森尾帯刀と改名し久次公を高野山へ

供奉仕れ。巻筆は又勝姫君の御供し。いかなる方へも身を忍び御助け申べしと。

34ウ

残る方なき重成が。指図の内に一間より。立出給ふ御夫婦の。御目に涙巻

筆が。夫に名残尽る期や。手負はにつこと打笑て。最早此世に望

なし。いづれもおさらはくと刀を抜はかつくりと。無常の風と諸共におしやはか

なく成にけり。わつと計に三人か。涙の血筋武蔵野や篠ふり乱す。村時

雨軒端浪よる風情なり。久次公は涙を払ひ。我一人の不徳にて三十

余女の死のみかは。親子夫婦が死別の歎き。赦してくれよと有ければ。ハ、ハ、

はつと恐るゝ三人が。身にあまりたる有難涙。勝姫君も御袖を絞り

35オ

給へは帯刀制してコレゝ親人。仰に従ひ是より御山へ御供せん去ながら。大領御

所へ御劔の御返答はと非を打たり。ホ、其申訳には此皺腹。只何事も我胸

中。夜明ぬ内に早くゝと制せられ。よはき心を取直し。イザ御立帯刀が。主

君をいさめ奉れば。涙ながらに久次公。勝姫君も諸共に。出る館の其

末は。別るゝ道の力草。かいゝしくも巻筆が是非もなき世の憂事

を。云ぬ心は汲てしる。其人々もかはりなく心に泣や。血の涙。見送る父

が義は鉄石。死出の門出や法の縁。悟ば同じ夢の夢。今ぞ本来無東西

35ウ

わかれ。くて(三重)

四冊目

難波に尊き大伽藍四天王寺と号せしは。仏法最初の霊場にて今も。絶せずとうくたらりと歩みを運ぶ。諸人の当に奉加の觀世音。己が五体に乗移り。鼻の下の建立も。無縁の亡者極樂へ。導く法としられたり。参詣は立とまり。何と長安や。いつ参つても尊いお寺じやないかいのふ。ハ、鯨の抹香くさい事いふはい。こちとらは仏より美なる女性が尊いの。イヤ夫はそふと。久吉様の御家来鬼上官殿は唐で凶ない手柄仕ながら大将の機嫌が

36才

損ね。腎虚とやらしてゐらるゝげなの。ハ、扱は腎虚。ホ、腎虚ならばどふでもやつぱりこいつは色からじやはいのと。あだ口の其所へ。岸沢が郎等熊本運平。家来引連いかつげに通るかゝれば参詣群集。皆そこゝに迹帰る。

運平あたり見廻しく。ヤア夫にゐるづくにうめら。若此■道へ美なる女性の二人連見当りは致さぬやと。尋に鈍才かぶり振。イエく左様な女は見あたり申さずと。聞て運平打黙き。扱は道筋をかへ迹廻して覺へ

たり。イヤナニ家来共やい。其方共も嘸草臥ならんが。先阿■野の方を尋

36ウ

て見ん。皆々つゞけに是非なくも打連かしこへ急ぎけり。聖衆来迎の声ならで。此世を渡る現銀商ひ。上爛田楽湯豆腐と口もかるゝ荷ひ売。

斯と見るより常楽鈍才。経読さして小声になり。コレ上爛や待兼て居たはいの。

ヤレく経や念仏で引入る様に成た所。さらば銘々此石で。ヲツトこぼれる。時に着は何じやの。イヤもふ御出家のお着なれば。こんにやくの田楽に湯どうふの吸物。何じや精進物計かい。ノウ常楽。泥鼈汁か鯰汁迄はいかずとも。

鯰昆布巻でも有ばよいにのふ。そんならお前方は。肉をあがりますかな。

37才

ますかとは爰な無粹め。精進物で吞る物じやないわいの。コレ後生じや

どふぞ肉を喰しておくれ。イヤモウ一■他生の縁とやら。あなた方の縁に繫

がれ。此上爛家も極樂往生致したい。コレ申何と此肉はどふでござりますな。ヤア手巾か。こいつ我等大好物。ハ、扱は鰻の戒名を手巾と申ますか。ドリヤ焼立てをあげふかと。ぬらりくらりの口車。乗出す両僧鰻の香に。余念たはいもなき風情。サア焼立と上爛かちろりと俱に差置ば余念だはいも生くさ坊主。扱ても味し。エ、時に上爛。心ざしじや一つさそふかい。左様ならお戴き申ませうと。手酌の

37ウ

息なし。さいつさゝれつ三人が極樂浄土の楽しみなり。折から来かゝる講頭の。ちよん兵衛

見るより声ふるはし。エ、こなた衆はく。和尚様や講中の目を抜て。殺生欲酒の戒を破つて。清浄潔斎の靈地を穢すとは仏尊釈尊の御罰。和

尚にかはつて折檻すると。杖ふり上てりうく。もふ了簡と上爛か。留ても聞ぬ堅親仁。せん方なくも徳利の酒茶碗に一ぱい。ア申く重々

の御尤なれど。其やうに服を立てはお癩が登る。マア白湯一つあがりませとさし出せば。腹立まぎれにがぶく。下戸の悲しさ五臓にしみ。立

38才

足さへもよろ。ア、どふやらふらつくくとどうどまるへは常楽鈍才心地はいかにと抱かゝへかいほうすればちよん兵衛が。糸より細き声音にて。

ア、苦しや絶がたや。今の白湯を吞と早。心がくれくとしてはんべるなり。五体は河豚に酔たる心地。ア、目まいや胸悪やと。苦しむ有さま。

与茂作は心地よく。コレ親父。今呑した酒はの。神変奇特酒といふて唐人の秘方。一滴でも吞が最期。心の乱るゝ大妙薬。喰迹のあぶれ物

に是を吞してくゝし上。銭のかはりに着はつた物をしてやるこんたん。イヤ申

38ウ

お前がたへ。商ひの邪魔する此ちよん兵衛。もふ斯したら死人も同然。かまはずとサ、あがりませく。こりやけうといと常楽鈍才又引受る天目酒。息なし

上戸のつゞけ呑。あれんたはひもながりける。うき事の。見には■れど斯とだに。人目を包む巻筆がよるへも浪の難波瀉。足もかよはき勝姫

を。伝き爰に鳥居前。巻筆は立寄て。イヤ申御出家様。我々は高野山へ参る者。阿部野と申街道を教へたべと尋れば。そしらぬ顔でふらくね

むり。つきほなければ是非なくも。門内さして行過る。跡に機嫌の常楽鈍才。何と

39才

上爛。美なる女性じやないかいのふ。あんな美しい代物を。抱てねはんとして見たいと。何のたはいもなき折ふし。俄に騒ぐ人群集何事やらんと上爛屋。荷

箱其戻迹行ば。しびれしちよん兵衛両僧の。肩に引かけふなぐ。こけつまろびつ立帰る。間も有せず巻筆は勝姫君の御手を引。漸遁るゝこなたより。

そりや遁すなと運平が下知に従ひあまたの組子。切てかゝるを甲斐く敷わたり合たる手練の切先。あしらい兼て見へければ。熊本いらつ

て切込刀。心得丁く打合たる。刃の光りはひらく。コリヤ手ひどいと運平

39ウ

ば。逸足出せば組子共。臆病風にさそはれて右往左往に迹行ば何国迄もと。(三重) 追て行。跡にハアく勝姫が此巻筆はいづくへとうろ付こなたに窺ふ

与茂作。何の苦もなく勝姫を。小脇に上首尾上爛や行がた知ず成にけり。遠

目に夫と巻筆が姫を人手に渡さじと。狂気の如く逸散に走躡く跡よりも。欺し

寄て雲平が只一討と切付るを。心得巻筆忠義の切先。受つ流しつ蝶鳥や夕日にきらめく

刃先は稲妻。たゞみかけたる太刀風に。コハ叶はじと熊本か欠出す後逃しも立ず。只人討に切倒し。程は有まい追付んと心夕陽巻筆が小棲りゝしく帯引。勝姫君の御跡を慕したふて

(三重)

40才

五冊目

昔誰。かゝる桜を此庭に。うつろはぬ色。枝も葉も。俱に。栄ふる武士の名も埋もれし

加藤主計頭正清。君の不興を蒙れど。常に替らぬ家中の賑ひ。掃除の役も色

を持。花の姿の秘共。手桶の水もちよいく。情の雫玉やちる吉野。初瀬の詠め

にも。劣はせじと寄つどひ。何としげ野。ア殿様は日外より。御遠慮とやらで引込でござるのじやげなが。お館は常にかはらず。浜松の音はざんざんざ。とんとどふした訳やら知ぬじやないかいのふ。さいのふわしもそふ思ふてゐるが。まだ其上に。今宵岸沢判官様の娘御かお興

40ウ

入との事。お座敷お庭の掃除迄。中間衆は遣はず拵への言訳。いやもふ唐までひ

いた殿様でも。色にかゝつてはやくたい。ヲ、そふともく弟御の左馬助様を勘当なされ。

科もない奥様は去てしまふ。其弟御の恋人が。兄御様の嫁御にお出なさるげな。今比奥

様が泣て計ござるで有ふと思や。おいとしぼいじやないかいのふと。てんばな様でも女の情

涙こぼれぞ。殊勝なり。奥よりひよかく猿嶋兵次。秘共が耳際にて。わいと一声飛退三人。

ハ、ハ、扱も味いは。悔りさしてこましたと。ひよふまつけば。梢が腹立。コレ三筋たらぬ猿

嶋殿。又してもく色々のちよふけ事。あほうには何が成と。いはれて少しむつと顔。ヤイ女

めいかにおれが

41才

結構な逆。三筋たらぬ猿嶋じやの。イヤあほうのとは慮外やつ。新参なれ共女と違ひ侍

の武士でしかもコリヤ。二本ざし。其威光で。梢しげ野袖谷三人共。勘当じやぞと。いふ事

さへも百の口九十。九文も抜作を。なぶつてやると目■の仕形。呑込袖谷。サア今のあほう

といふたはな。あなたに惚た打付にいはいぬ故。あの字とほの字の頭字を。いふたのでござ

んする。何じやおれに惚たのか。がおれじやが。女三人。乗へは一人。ハテどふがなと小首

傾け。思案顔。おかしさ隠して口々に。其思案借ませうかへ。何じや試案をかそふ。シテ其

思案とはマ、どふじや。さいなア。何ぼう達者な生れ付でも。斯三人がせぶつたら。天寿小

西に三臓園。

41ウ

地黄王子の勢揃へでも。つゞくまい。そこを梢が智慧の海と。後に廻り。めんないちどり。

是が則吾妻菊。お前に当るが恵方果報。おつと合点。しめこの兎と立上れば。あなたへ

突やり。こなたへ突。中によるく猿嶋兵次。サア是からが肝心要。おれをだかふと抱まいと。

そもじ達の肩時代じや。結ぶの神へ願かけたりと。探り廻りし座敷の程。天窓を

びつしやりあいたしこはく秘共。めいゝすりぬけ次の間へ。はずして行とは白書院。じつゝ

入来る森本覚兵衛。指うつむいたる屈託顔。コリヤしてやつた女房しやと。抱付兵次物をも
いはず突放せば。これは強いは。女に似合ぬ。功の者閨の軍も嘸かしと。又も取付腕首を
42才

しつかと握り。うつそりが例のほたへ嗜るおらふと突飛され。アイタ、是は違ふた。夢では
ないかと云つゝほどくめんないちどり。コリヤ女めらはどこにおる返せ。戻せと奥の間へ畳
蹴立て走入。エ、談合相人にならぬ馬鹿者。心得がたきは主人の心。ハテいか、ぞとつ置
つ思案に吐息次の間より。奏者役罷出。殿様へ直々に御対面なされんと。岸沢光盛様の御家
来。鳴見軍蔵殿御入来なりと。いふ間程なく入来る鳴見軍蔵。主の威光を

肩で切。のけぞり返り打通れば。森本は座を改め。是はく軍蔵殿には御役目御苦
勞。主人正清義は御存知の通り遠慮の身分故。此頃より引籠有。仰置るゝ事有ば

42ウ

某へ承はらんと。いはせも果ず。ハ、其遠慮は正清殿のお心から。大領久吉公の御勘
当。又うつけ者の久次殿。勅命を請ながら詮義延引に相成し朝日丸の御太刀。今に知ず。
其太刀を詮義仕出さば。それを功に勘当御宥免との仰。則請取役は手前の主

人岸沢判官。又主人が息女綾織殿御所望のよし。右御太刀さへ出れば早速の御興入。

此義も甚心がり。早くお手渡し致したいと光盛様にもお心ぜき。御太刀の有所も
定て相知申さでござらふと。己が主人の盜しを詮義の底意探る邪智。森本

わざとそゝらぬ体。御退屈お茶煙草と挨拶すれば。イヤ心遣ひ御無用。茶

43才

も煙草も咽へ通らぬ此お座敷此方計すはくと煙草吞ても居られ

まいと。毒気を含む一言に。短気の森本くはつとせき上。ヤア堂侍の捨扶持喰ふ
へろく武しか。異国を股にかけし主従か胸中は。知まい。たまれ森本四海の政
務を預かる大役。其中の等。頭たる岸沢公。名代とは云ながら今。今日計は光盛も同
前。倍臣の分としていはせて置ば存外至極。其ほうげた切さげんと。柄に手をかけ詰
寄ば。こなたも身構へ詰寄く■にかうよと見へたる所へ。ヤレ籠忽成兩人加藤主
計頭。ハテ対面と優美の顔色正清席を改めて。珍らしや鳴見軍蔵。岸沢

43ウ

氏の名代太義。委細あれにて承知せり。大領より仰付られし御太刀は。漸今日尋
出し正清が手に入たり。ナニ朝日丸が手に入るとはそりや偽り。三浦重成さへ詮義
をとげず。主人久次公共切腹致せしに。手に入たとは覺束ない。ハテ扱此使者は疑ひ
深い。生れ付て主計頭偽りは大嫌ひ。殊に息女綾織を婦妻に申請る某。なりや

岸沢殿は舅。何の偽りいふべきやと。柔和の詞に打うなづき。誠に御太刀さへ出れば
直様お興入。御互に賀舅。併ながら其御太刀拙者一寸。御内見と。いはせも立ず
はつたと白眼付。ヤア最前から詞をかへす慮外やつ。毛唐人に泡吹せし加藤正清。

44才

誰に恐れて偽りいふへき早く帰つて此通り主人へ達し興入を取急げと尖き詞に

あら膽とられ。目礼さへもそこに逝ぎは悪く立帰る。跡見送つて森本寛兵衛。主人の傍に差寄て。今において御手に入ざるは朝日丸。岸沢殿への御返答愚案に落す候と。憚りなく言放せば。ホ、尤の尋なれ共我眼力は天眼鏡。劔の有所とくより遠察。ム、左程御存知の上何故詮義は。サ、其詮義をゆるめ置も深き思案有ての事。ハテのふ入ざる事に無益の心配すなど。優美の詞物かけに。始終立聞母真弓。弦せぬ弓矢右手に携へしとやかに立出。御劔の有所は遠察ならんか
44ウ

母がそちへの送り物。サ判読せよと有ければ。弓矢追取主計頭良打守り居たりしが。ム、御心を込られし母人の送り物。二弦の弓を引すまじと女房夕霜が離縁の詫。又弟が勘当の弦を赦せよとの仰ならんか。憚りながら某が心にあたはず。此弓矢益なしと折て捨たる一言に。アレそれは目当か違ふぞや。此母が心はな弦なき弓は岸沢が娘の綾織。弟左馬助清明ととくより訳有ると。サアほのかに聞。それに何ぞや兄たる身をもつて横恋慕。貞節厚き嫁の夕霜。離別したる無法者。心の外とは云ながら。サア返答聞ん正清と老の怒り齒ざしみに。恨の涙はらく見向もやらず主計頭。コリヤ森本■揃ふたるアノ桜
45才

一枝折。■サ早くくと正清が。心有げの一言も。主命是非なく立上り折取桜の一枝を主人の前に差出す。正清じろりと打詠め。散も初めぬ此桜折と申付る逆折取は心なし。元のごとくアノ桜へ返せ。く。コハ仰共覚へず。一旦切し其一枝元の如くに。ならぬといふのか。左程目前其理を弁へながら。何故岸沢が使者を討はたそふとは致せしぞ。成程其御咎は御尤千万。申訳は拙者が腹。ヤア空気者めが。其方ごとき腹。何千何百切たりとて言訳に成べきや。縁組すれば岸沢は我舅。すりや汝が為にも主ならずや。主に適する慮外
やつと。枝追取てりうく。打れてひるまぬ忠義の魂。主人の顔を良打守り。スリヤ
45ウ

御真実岸沢と縁組なさるゝお心よな。おんでもない事。悪く異見立すれば主従の縁切ふか。サア其義は。ヤアマじくと見苦しき頬構へ。目通り叶はぬ早立と。詞も荒浪立兼る渚の千鳥しほくと。入を待かね母真弓。エ、情なや浅間しや。今度朝鮮征伐の先鋒を給はり。比類なき高名手柄も水の泡なる君の御不興。まだ其上に恥の上塗ほんにまあ人らしき今の一言。此母への頬当の打擲か。異見するが氣にくはずば。サア母もいつそ打。サア殺せくと。身をふるはし。恩愛節成真身の異見涙先立計なり。良有て落花の一枝。母の前に直し置。花物いはねど正清か。所存の底意得
46才

と御賢慮有べしと。詞の花や心の宝箱に咲して。隔の襖引立奥へ立て入跡には母が思案の小枝。胸の水を結ぶ手のいつか。解なん春の風庭に。奴がかつつくばい。御門前に君い女夫の鳥追。さゝらの竹のちよきくと。其手品の面白さ。後室様のお慰と只今是へ鳥追参れと呼つぐ奴。人目を覆ふ編笠の内
や床しき夕霜が。うつす姿の。鏡山くもる思ひを左馬助。ましらげもなき鳥追

姿。千町や万町の鳥追が参つて。福の神祝ひこめ。しらげもよねやろ。ましら
げもよねやろ。母様へ参つてお詫頼と申。我も願ひ候はゞ俱に嬉しう侍へど。殿は
46ウ

いかゞ思さんと。哥の唱哥に母真弓。我子よ嫁と飛立思ひ。かけよらんとせしが心を
しづめ。ヤレ清明かなつかしや。母へ願ひの今の唱哥。貞女を立る夕霜の。思ふにかひ
なき正清の行跡。異見に事寄心の底。探れどいかな打明ぬは。もしや天魔の
見入しかと。解ぬは母の心尽し。推量せよと老が身の。涙は俱に夕霜御前。
男は女からと何かに付。夫のお心かはりしも皆私が不調法。お詫は母の幾重にも。
御慈悲と計夕霜の袖に涙の玉あられ。清明も顔ふり上。父に後れて我達
も武士一通り軍学迄。親に勝りし大恩の心を無下なる身の徒。余り申
47才

訳がなさ。お赦し有は。其座を去ず腹切覚悟。よごれた此類。押拭ふて参し
は。ヲ、正清が心の庭。探らん為の二人が心底。連ゆゝしき貞女と義心。かう心が合
からは。輿入の有こそ幸。心底探るは今宵の祝言。マアそれ迄は二人共。わしが部
屋へと先に立。腰に梓の強弓も。案山子にあらで鳥追姿伴ひ。一間へ
入にけり。早嫁君のお輿入と上下賑ふ御寿き。祝ふは菊の大燭台は
こぶ姫待女郎花をかざりの出向ひは。深山なる。雪の帽子をもち
出る月も今宵は面はやく。顔に紅葉の綾織が。恋しき人を松の間の
47ウ

千代を。込てぞ座に着ば。それとしらせに加藤正清。襖押明千鳥足
梢が肩を杖柱。是は嫁御寮只今御入来。■待かね一献下されて。礼義
立も取置。略衣の俣の此花賀様。御免々。それ女共。銚子持々と。いふに返事
も。妬の色香埋火の。胸に羽を敷蝶花形。三方携へ土器のうちぐもり
なる。夕霜御前。正清見るより気色をかへコリヤ女。わりや誰赦して此所へ。次へ
立早く立。ハイ々イヤ私は。たつた今御奉公に参りました。嫁御寮のお傍遣ひ。今
参りのハイ姫でござります。ム、扱は奥綾織が召遣ひとな。出かしたサ、酌
48才

せい。綾織盃取上召れ。是はいかな事。返事もせず差うつむいて居召るはハ、
聞へた。女原が見る前と。初心なるは尤々。お恥かしいハ、イヤもふかやうに義式を
取行ふが。則是夫婦の堅めと。盃取上さし出せば。取次夕霜綾織が袋。
に納めし。太刀一振。正清か前に差置て手をつかへ。自が心計の此一振。憚り
ながら幾千代かけて。ヲツト皆迄のたまふな。二世のかためのしつくりと。差合し
たる引出物。コレ々慥に落手仕る。ガ何とやら嫁君には。物思はしき顔持にて気
の毒千万。幸かなコリヤ新参の姫。綾織が心もあやに琴の一曲サ、イヤ
48ウ

所望と。酒がいはする正清の。詞にいな共岩橋の渡りももしや夫の底意。

探るも操女房が。実氣を律に。恨わび。ほさぬ袖とは今ぞしる君は

つながぬ沖の船。風のさそへばよる身じや物を。庭木の陰に左馬助兄

の心底窺ふ闇の恋の忍び音互の奇縁綾織が飛立思ひ。是はしたり。

嫁御寮には何を見付て。ハラ扱まあ下に居やいの。コリヤく女何をうつかり。今の

跡を。サア早ふ。アイ。つらい浮世の。山おろし。よそのうらはへ。吹てよる。昼共

わかで忘れぬ。隙なす琴の其音色。正清は耳そば立。ハテ心得ぬ。願

49才

の筋に愁ひを顕はすべかりしか。殺伐の音発するは。ハテいぶかしいとあ

たりへ心月影のくらきに紛るゝ忍びの曲者。桜を幸足代に。身をしそめ

たる梢の陰。一心不乱綾織が。こがるゝ人に氣も。空蟬。それと見て取夕霜が。

ア、コレ申。互の願ひは母様に。サア今は悪いくを。聞取清明打黙き又もかしこへ

身を忍ぶ。コリヤ女わりや何をいふ。サア私が申たは。何がどふした。サアそれは。ヲ、そ

れく。其様に大酒を遊ばしては。お身のお為にわるいと存じ。憚ながら殿様へ

と。事に紛らす利発の奥方。何を儕がこしやく千万。コリヤ其方は居間へ

49ウ

いて床を取。アノ私に。但しはいやか。ハイイ、エ。早く行。何をぐずぐ。早くうせふも夫

の心胸に焼火の夕霜が是非も涙に立て行。サア是からが色直しいざお小袖

と立騒ぐ娘はした。イヤ色直しの小袖は申付る者有。其方共は次へ立。ヤア

兵次早参れと。仰にはつと答さへ。取しまりなき猿嶋がちよこく走りの狐

足。そりやこそな。殿様があの女中と。ねんころころんくや。ねんころころんころ

ろんや。ねんころころんくはヲ、おかし。正清屹■■やりいかに言訳。面に似る空氣

の根本。今明鏡に写しくれんと意義を正し。色に事寄某を討取んと。

50才

差越たる此綾織。我見る前で討て捨よ。エ、あの船に。此女を切かへサア早く討。エ、。

ハ、。めつたには討れまい。岸沢か郎等岡田友平。正清を計らつとは愚く。早立上つて。

綾織か首討と。五臓を貫く明智の詞。さしもの岡田が一世の瀬戸。もふ是迄

と切付る。正清心得件の袋其俣丁と請たる早足。刀のなまりか鏝元より。ほつき

と折れは透さず■添。切込腕首取手も見せず。庭へどつさり折も森本起し

も立す友平が。首討落す手練の太刀先。なむあみだ仏と綾織が声諸共に

懐剣を。咽にかはと突立れば。一間に窺ふ夕霜御前。何事と心もそゞろ。正清

50ウ

横手をはたと打。ハ、適貞節健氣の最期。引手物になぞたへし。此太刀とぞ。岸沢判官。

奪隠せし朝日の御劔。今岡田が打かけし刀。■折しは劔の威徳。父に

かはりし大忠心ホ、。出かされたり綾織と明察の一言に。扱はと夕霜森本

もともに感ずるばかりなり。手負はくるしき息をつぎ。コハ冥加

なき御仰有がたし共忝し共。詞に尽ぬ我身の上。久吉様の御厚恩。蒙りながら

父上の。日々につのりし大悪心。傍で見る目の其悲しさ。御異見申せど。聞入なく。

まだ其上に胴欲な。いとしいお人の兄上を。討手の為の此興入。せめては父の御

51才

命が。助けたい計に。親を欺して勿体ない。其御劔を盗出し。お手に入しは命乞。お情
深き正清様。御慈悲やは。父上の身の行末。二つには清明御。せめて未来は夫
婦の縁。お赦しなされて下さりませ。是計が。今端の迷ひ。申夕霜様。どふぞ
あなたのお執成。願ひますると手を合す心の内のいちらしさ。勇気たゆま
ぬ正清も不便の涙。はらう。お道理様やと夕霜が時雨に晴間なかりけり。

義を鉄石の加藤が大音。岸沢が命乞は刀にかけて請合しが。功は立共謀叛の
岸沢。其血脉たる其方と弟が未来の縁。思ひも寄ず。叶はぬ願と。聞て

51ウ

頼の綱も切わつと計に。泣しづむ。ヤレ其仲人は則此母。夫婦の縁は殺せしと。

障子の内に。朱に染たる母真弓。コハ何故の御自害と。驚く人々かけ出る

清明手負も呆るゝ計けり。ヤレ騒ぐまい驚くまい。我子ながらも智勇の

正清。血の緒の弟が愛におぼれ。出かし顔の強異見。親ながら恥かしや。かけ

たる謎の其返事。今こそ解る。コレ此生害。譬爺御は悪人でも。忠孝操

立通し。清き最期の綾織殿。いとしい共。いたはし共。思ふはやつぱり愛着の子に引

たるゝ親心。推量有て今端の願ひ。叶へてやつて下されと老の詞の百千筋。

52才

乱さぬ糸口正清が。五体をからむ如くにて愚成かな我一途御太刀の有所は謀

叛の岸沢。我を計るを返つて方便は密なりと。母女房にかくし過し義を金石の刃

鉄廻つて勿体なや。蒼海浅き母の御慈悲。一命捨て給ふとは心付ざる此身

の誤り。我子にかはる御生害。コリヤあだに思ふな弟と。兄の心の千万無量。詞はなくて清

明が只手を合す悲歎の涙。俱に歎きは夕霜御前いかに浮世の義理しやとて。

ほんにはかい此お姿。ア、歎くまい悲しむまい老木の我は枯る共逆さまならぬ順の道。

迷はぬ死出の其連は。まだみづくと。蕾の花。かゝる障りのないならば。似合の縁と

52ウ

祝ひいはふて。一門広ふせふものをと。歎き給へは手負は猶。冥加なや一

■片時のお宮仕へもいたさぬ身に。お命給はる勿体なさ死出の旅路の御介

抱。一つ蓮でござ孝行それがせめての楽しみと。はかなき思ひ這寄て。かこち歎けば

誰々も同じ思ひの憂涙こらへし涙。一時に落て流るゝ瀧津浪巖をうがつ

如くなり。正清は涙を払ひ。母の仰もだしがたく。一つには節義の綾織。今日只今清明と。

尽未來迄夫婦成ぞ。併計略とは云ながら仮にも妻と呼し綾織。離縁の

印は此一巻と。懐中より取出すは。叛逆一味岸沢が連判状灯にさし付焼捨

53才

れは重く残る方なき御情。最早此世に望なしとはいふ物の清明様お名残惜いといふ汐

の。引汐時や断末魔。知死期は俱にはくきゞの有かなきかの今端の声音。嫁女ゝの人言が。筐となりてはかなくも一度に。息たへにけりかゝる歎きの折も白砂。蹴立かけたて浅山小平太。御注進と一越調。扱も今日。久吉公の御在城。桃山の■天地にも崩る計にて。大石大木土をうかつて思ひも寄ぬ大地震。今も混沌するやらんと衢に男女が叫ぶ声。イヤはや目も当られぬ次第にて。我君の御身の上危ふしく。急ぎ御守護有へしと申捨てぞ引かへす。猶予ならざる御大事。装束早くと。夫の差図に夕霜御前取出す腹巻陣

53ウ

羽織。心得爰に小手脛当。暫時にかはる陣装束。其間に引出す駿足の。輿にしつかり森本か。御召ぞふとすゝむるうち。清明も庭におり立て君の大事に候へば。俱にお供といふを制してイヤゝゝ汝は館に御太刀の守護。二には母の死骸綾織共。■に葬られよ。庭の畔に夜啼鳥の怪しき羽叩き心付しか弟と。いふ間も有ず小柄の手裏剣。■を放れどつさりと落る曲者から竹わりホゝゝいて急がんと大男の椽よりひらりと正清が。早乗出す後影。見送る妻や弟の。中に老木の■桜。ちつてはかなき糸桜。無道の。桜色うせて。しほるゝ心いさむる勇者は虎の尾ざくら。千里に響く鬼上官其名は隠れ桃山の御館を。さして(三重)かけり行

54オ

加藤正清主従は。主君の安否いかゝそと駒を早めて欠来る大路。道をふさいで数多の雑人声ゝに。ヤア大領の御勘気請し主計頭早引かへせと罵つたり。正清眼をくはつといからし。ヤア嵐に異ならぬ倭人原。我手をおろすに及ばず。コリヤゝ覚■。首をならべて出座にせよ。イテ急かんと正清か駒の蹄に砂煙跡に森本いさみ声。サア是からは主人の名代。此世の暇とらせんと。聞より一度に追取巻。ヤア鬼の名代たゝき鉦。念仏申せと抜つれ。切てかゝるを渡り合。暫し時をそ。うつしける。義信の太刀先するとくも一人も残さず切尽し。イテ是より主人の御供おくれしと。逸足出して森本

54ウ

跡を。したふて急ぎ行。されば桃山の新御所には大領始数多の近臣。其外上下の女中方只■水を■思ひ。東西わかす迹迷ふ。天地の奇変今も混沌するやらんと。色を失ふ御殿の騒ぎ。君の大事と正清が大手の門をかたく閉。櫓の上には高挑灯守りきびしく見へにける。追々はせくる諸将のめんゝ。真先に高山玄蕃大音上。ヤアゝ御主君大領の御身の上気づかはしく。乗始増田中沢参着せり。早く開門ゝと呼はつたり。櫓のかい楯左右開かせ。威風も猛き加藤正清。雷鳴の如き大音にて。ヤア大扶持喰ひの青侍事しつまりてしやく■さい忠臣顔。異賊も恐るゝ鬼

55オ

上官。大領の守護たれば一人も門内へは叶はぬ事退散せよと見下す猛威恐れてかへす詞さへ。互に顔を見合す計。中にも増田声をひそめ。岸沢氏の下知を請。申合せし我々。此騒動に大領始。北条氏政をしまふて取手つがひ。さればゝ此高山とても。今日の凶をはづしては。判官殿へ申訳がない。といふてもアノ。鬼上官め

が守護致せば。たとへ門内へ入迎も。たやすく事は計られず。ハテどふがなと佞悪の。邪智を廻らす時しも有。又も地響き鳴動し天地一度に滅する計。こりやたまらぬと両将は。たまりの仮屋へ。こけつ転ひつ逃込しが。さしも丈夫の御仮家も。めつ

55ウ

くゆさくしき浪の。打が如くに見へければ。のふ悲しやといふ声が。此世の暇天の責。悪の報ひは忽に押に打れて死たるは。心地よくこそ見へにけり。正清櫓に

つゝ立上り。アレク者共。目前不忠の佞人原。小気味よき死さま。ハ、ハ、イテ是よりは主君の御安危。心元なし。者共。つゝけと。正清は御殿を。さして(三重)かけり行

六冊目

花の下風ヤヨ■に匂ふ。さまと添寝の鬘の■にヤヨ匂ふは。明なんとして玉ぼこの。跡またくらし。森の陰。上福嶋の氏の神天満宮の御社は。千早振せぬ靈験の。聞へそ四

56才

方にいちじるし。今日真柴家の御代参。道の人当はき掃除庄屋庄六が先に立百性数多出来り。ヤのふ皆の衆。けふ此社の天神様へ。真柴御所から御代参。福嶋左衛門様とやら御太身がござるげな。境内馬場先土手の草。塵一本も置れぬ掃除随分

念に念を入。塵抹な事やお仕やんな。まだ言渡す事が有。けふ参らしやる

殿様は。どふでもきつい恋仕と見へ。天神様の拝殿で聞しやれ。おつやをなさるといふ

事じや。おつやといふは何所の娘じや。かんまへて覗くまいぞ。もしあてやかな娘ごせの。

ひよつと泣声が聞へたと俣。玉垣のふし穴などをコレ。穢しやつたら聞ませぬ。急度其分い

ひ

56ウ

付たと。下知する庄屋が知恵袋。ぬくひは遠海辺に。育つ奇特としられけり。実や人の親の。聞ならぬ身も子に迷ふ。浮世のさまや稚子を。我身の。肌にくくめても。

乳なき父が恩愛に。ゆぶりつすかし。行過る。それと庄屋が呼留。ヤアそれへ行若ものは。

福嶋一の美人の聞へ。桶屋の娘をちよろまかしたるゑせ者。賀弓助と見たはひが

目か。ヤアお待やれととききよ声。ホウ是はどなたぞと思ふたりや。お庄屋様でござります

か。いつ見ても御機嫌顔。御代参の道の警衛。となたもいつかい御苦勞様。ヤ苦勞も

役目は是非がないが。聞ば親仁の太郎助が何やらやんぐはん起して。貴様を追出した

57才

ときのふから村中の噂。よい事が■めう内にも行れず。ソリヤマあほんの事かいの。サア聞て下さりませ。何が心に合ぬやら。夢見た様に昨日の朝。縁を切た出て行てと。御ろうしま

せ此ちつぼめも私に付て。ムウそりや男の子は男に付。世の大法で仕やつたもの。

ガ小糠三合持ていりや。入簪すなどは此事じやてやのよ。からも正直入簪じやが。

折るかゝめで業をわかす時は。まくり出す事は扱置て。まくり出にやならぬに

こまる。乳のないこなた。ア嘸迷惑察し入たてのよ。したが平生無理をせぬ太郎介。

まだ老耄する年てもなし。是には何ぞ様子の有そな事。ノウ皆の衆。そふじや

57ウ

おじやらぬか。そふ共く。それが定しや。がけふは何分いそがしい。あすは村中が惣がより。太郎助の内へ寄かけて。詫言をしてしんぜうの。ハテ気の毒とめんくに。在所氣質の深切よそに聞さへ殊勝なり。折から風は遠近の。時打鐘のりうくと。鳴は社参

の。時刻のひゞき。ヤアゝアノ鐘は早五つ。福嶋様の御出の時刻。怠つてゐてお目玉を。もらはぬ先と挨拶も。皆そこゝに庄六を。先に立せて歩み行。フウけふ此宮へ代参は真柴が郎等福嶋左衛門。ハテどふがなとつ置つ。思案半へ向ふより。杖を力に盲人の。闇の浮世をとぼくと。太郎助が弟仁左衛門。来ると見るより幸と。傍に立寄杖をひかへ伯父者人様

58才

是は手引も連ず早くから何所へお出なされます。ヤアそふいふそなたはアノ姪が聾殿。おりやこなたに逢たふてゝ成ませなんだ。聞ば兄貴が何じややら。むくろ腹立て。そなたを縁切内を出したげな。嘸難義でござらふのふ。ハイ御推量なされて

下さりませ。此身の難義は俣のかは。只不便なは此坊主め。乳くと泣計。親の心子しらぬ可愛さ。ヲゝそふしやく。そふなふてそふしてそこに抱てゐやしやるか。ハイしやう事なしの泣寝入。今すやくと寝ております。■こつちへおこさつしやれ。ゝ。嘸母親めも乳がはつて。迷惑してをる■かな有ぞいの。兄貴に隠しそつと逢せ。たんのうする程乳を呑しも

58ウ

しやうし。又兄貴にも面請して。おれがとつくりとわりくどき。譬こなたに万々一。あま逆様な事有逆。子迄有中を引分るといふこんな殺生な事が有物かいの。ヲゝ可愛そふに弓助殿。何所へも行事はないぞや。兄貴の機嫌の直る迄。幾日成共寝るのはこちの内。晩に必待てゐますぞや。コレいつかい御深切。そんならぼんよいてこいよ。御らうしませ抱れ心がよいじややら。やつぱりすやくと此寝顔。かゝ様の顔も見て。乳をたんと呑でこいよ。左様ならどふそお頼申ます。ヲゝ氣遣ひさしやるな。心得ました。そんなら聾殿いてきましょ。さらばくと仁左衛門は。元来し道へ立帰る。跡見送つて一思案。ヤ天の与へと道のべの。竹藪てう

59才

どはず切に。直に武辺の焼とがし。待間遅しと。物陰に身をひそめてぞ忍び居る。実呑舟の鱗は万里の波に其身を寄す。されば福嶋左衛門正則。真柴大樹に臣し仕へ。

国に■たる爪牙の美名。けふぞ主君の代■と。道の行列美麗を究め。出る旭と金紋の。輝く対の挟箱。台笠立笠大鳥毛。黄金きらめく乗物を。■居間近く昇すへたり。

時にかたへの藪垣よりぱつと羽打て群鳥の啼を放れ驚く風情。戸を開かせて左衛門正則。空打守り眉をしはめ。ハテ心得ぬ。帰雁烈を乱す時は伏兵有と孫呉が教へ時は今。夜陰をはなれ。太陽本に登る曙。諸鳥啼を放るゝ事。其時既に至るといへ共。正しく物におとろ

59ウ

かされ。悲鳴を発するアノ有様。察する所左衛門を。討んとはかる不敵の曲者。此藪陰

にひそむよなど。未然を悟る眼力に。扱はと騒ぐ数多の家来。我討当んとひしめくにぞ。正則呼留ヤレ待者共。まだ頼出しもせざる内。術を人にけどらるゝ微運の曲者。ねらふとて何事あらん。只其俣に捨置と。騒がぬ大胆戸を引立。神殿さして行過る。木影もれ出る弓助が。馬手に武鐘血ばしる眼。子方鉄槌の妙計も。祖龍を白浪沙に討事叶はず。ひいづる運とかたむく運。天のたすくる運命は。我術にもかなはぬか。チエ、口おしやなア

60才

七冊目 上福嶋の桶屋太郎助の住家

冬籠り梢も時ならで。春にしれぬ花ぞ咲。雪の詠めも取分て上福嶋の片辺り。軒にはびこる松が枝も。世をばすね木の侘住居。志す日の命日と傍近所を呼集め。饗応茶より入鼻の。勘助が声高く。ホレ、おむす。おれは鼻が此通りにわるい故。親仁に一通り云たふてもわかれぬがちと。遠慮して居ますが。どふして賀殿は追出したの。コレ、勘助殿。お前の云しやんす事は何にも分らぬ。おきの殿がけふ内方に志しの仏が有故。参つてくれとおしやんすを幸ひ。

60ウ

近所中が皆来しました。太郎助殿に逢て。賀殿の侘言せうと思ふて来しました。とふいふ訳でちいさい子ともに追出さしやつた。太郎助殿に逢たいわいのと。隣姑深切ぶりのうたてさよ。折から表へひよつか。村の束ねを肩できる庄屋の庄六かずつと入。コレ村の衆。譬、心ざしの仏が有といふて招かしやらふが。二度に一度は又ちつとづゝ遠慮して。氣転利して早ふ逝しやれ。イエ、けふこちとらが此様にしてゐるは慰じやござりませぬ追出した賀殿の挨拶。ハテ扱夫を貴様達が世話やかいでも。此庄六が扣へてゐるおれに任して皆逝にや。そんなら庄屋様よいよやうに頼みましたぞへ。おきの

61才

様いかい御造作。そんならもふ皆お帰りなされますか。又緩りつと門送り。挨拶さへもつどゝに。抜目内義の袂をひかへ。コレおきぼ。おきの様。太郎助殿はお留主かへ。ハイまだ今朝から戻られませぬ。留主か。夫は重畳。幸あたりに入ざればなし。此中やつた文の返事は。どふしておくれるお心ぞ。今一遍文認めふとは思へ共。夫も書たり読たり面倒な。いつそ守宮の黒焼お菓をかけましょと。コレ此。庄六様が。思ひ付。モウ此中からどふで黒焼の五六百がのも振かけたれど。豊程も利ばこそ。けふは置付無理頼み。其様につん、つしてもそんなに逢ふを楽しみに。たつた一度。此庄屋が風味合

61ウ

を試み給へ。コレ、おきの君様、といやがる者を。無理無体。抱付吸付其所へ。戻りかゝりて立聞太郎助。斯と見るより走寄庄屋が首筋。取て引退頭転倒ヲ、と、様よい所へよふ戻つて下さんした。最前からあの庄屋づらがナ。コレ、必おれを誘るまい。爰にこぼれて聞てゐると砂打払ひ起直り。太郎助殿はけふ此庄屋が参りし子細は。其元の賀弓助何科有て追出されしぞ。村中が其訳が聞たいとの事故。

此庄六か間に参つた何の訳で追出した。余り思ひがけない。子細を聞いて下されいのふ。ア、そんならこなたが。追出した聳の挨拶する気か。する共くしたふてくならぬ

62才

わいの。ハ、聳の挨拶する物がおきのをとらへて。守宮の黒焼お茶をかけまじよかとは。ハレ深切な挨拶じやのふと。云れて庄屋は消たい心地。ア、コレもふ何事も是じやくと手を合せ。お詫くと手をつかへ額を庭に押付る。■の口の番人が門口からきよと敷。サア、大事じやく。久吉様の御家来福嶋左衛門様とやらが。武田の余類を詮義の為此村へござるといの。サア、早ふ出向はしやれ。ソレ、そこへもござると。聞て庄屋がとちめんぼう。狼狽廻つて立帰る。程も有せず表の方。烈を正してあまたの胴勢乗物かたへに昇居れば。内に親子は不審顔。こ

62ウ

なたに近習が手をつかへ桶屋太郎助宅は是でござりますと。家来がしらせに乗物の戸を押ひらかせ。真柴の近臣福嶋左衛門。ゆうくとあゆみ出。コリヤ、其方達は一人も残らず村口に相待をれ。早くくと家来を遠ざけ。這入敷居の節迄も。稚心に覚有。内の勝手はかはらねど。かはり果たる爺親の。頭は雪と見紛ふ計。絶て久しき対面にや、打うるむ計也。太郎助は小腰をかぐめ。

見れば歴々のお侍様。此桶屋へお出なされしは。御座敷の御用向用水桶のお詠へ。マア、是へと見合す顔あなたはどふやら見た様なほんに夫よ。そちやちいさい

63才

時家出した兄の市松じやござりませぬか。親人先は御賢勝で祝着至極と相述べれば。そんならアノ福嶋左衛門といふ侍が。おれが子の市松で有たか。マア、我も達者ためでたい。コリヤ、おきのアレあれを見い。常から我に咄した兄の市松じやわい。妹そちも無事で重畳。アイ、兄様にもお達者でと。挨拶さへも云兼る綾と木綿の裏表。そぐはぬ親子兄弟も。心に隔は。なかりける。太郎助はた、機嫌よく。マア、寒いのによふ来てくれた。サア、あろりの傍へおじやいの。ア、ちいさい時はどふも斯もならぬわんぱく者で有たぞい。二つ子の時から這あるひて

63ウ

わる事しをる。仕業の邪魔と死だ婆が。アレあそこに有あの石臼にく、り付て置たらば。夫なりでずうと引摺あるく力強。十一の春天神の森で喧嘩仕出し。近所の子供に手疵を負せ。折檻したか気に入ぬと家出した。どうばり者。何でもこいつ罰利生が有て面白いと。尋もせず打捨て置たが。アノ方々の軍で手柄した。福嶋左衛門といふがわがみの事で有ふとはほんに夢にもしらなんだ。成程主命に暇なら文通の便りも致さぬ。不孝の段真平御用捨て下りませう。今日はる、罷越たは。武田勝頼の残党ばら此福

64才

嶋に徘徊する由。詮義致して立帰れと有主君久吉の厳命。ヤアスリヤアノ武田の残党

をや。いかにも。当家に冠する叛逆人。従類を絶さん為。エ、と驚く娘おきの。左衛門が傍にすり寄て。シテ其詮義さしやんすお前の当途はへ。ホ、謀叛の棟梁たる曲者。そちが連添弓助とやら。誠は武田四郎が嫡子太郎信勝じやはい。スリヤアノ弓助殿は謀叛人とな。ホイ。親子兄弟の縁は内證重■迄掟糺すが四海の政務。成程以前は此太郎助が忤なれ共。今では久吉様の御家来。縁者たり共赦さぬは武士の魂。シタガ心に合ぬ智弓助。孫を付て勘当したればあかの他人。何と夫でも此嫁や太郎助に科がかゝるか兄よ。サ、どふじやくと爺親の尋る詞に打諾き。ホ、勘当有し

64ウ

上からは親人始妹にも。御崇は是なし。此上は某が。草を分つて太郎信勝。尋出して召捕ん。親人さらばと立上るを。引とめて是は又性急な。久しぶりで親の内へ敷入。今夜は緩りと休んだかよいは。又信勝めが詮義は我か親方久吉様へのおれが面晴。今夜中に尋出し。親子共に首討て渡そふはい。スリヤ親人には謀叛人の信勝を。ワイヤイ。我は知まいか。少々ゑいやつたうも覚てゐる太郎助。めつたに仕兼はせぬはいやいと。いふにおきのが塞る胸。コレと様。そりやおまへ誠かへ。ハテ扱何もいふ事はない。わりやそこへ火を燈せ。兄は又久しぶり。奥へ往てなじみの火燵へあたり。緩りと休みや。いか様仰にしたがひ休息仕らん。親人後刻と一揖し。後の■は白張の障子引立入にけり。又降しきる。白妙の。

65オ

ふゞきにいと埋ゑる。心の隔親と子が指合せても諾さへ。何と詮方なら柴を。くべて。娘が吹付る。自在の竹のふしの間も。忘れ兼たる恩愛の涙に曇る冬

の空胸の。氷の解兼しおきのは親の傍に寄。イヤコレ爺様。思ひがけない兄様の御出生。嬉しいといふに云れぬ夫の身の上。可愛い我子の半次郎迄今宵の中に

首討て。兄様へ渡さふと請合しやんしたお前の心。真実でござんすかへ。ハテ知た事をいふ程にの。真実も真実。しかも肉身といふ真実。ハ、何の夫を悔りする事が有

ぞいやい。兄が手柄にするはいやいとにべなき詞あいそなき。顔恨めしげに打詠め。ハ、

65ウ

聞へませぬ爺様。兄様計がお前の子で。わたしや子ではないかいな。そりや胴欲しや胴欲でござんすはいな。木々の葉末の虫だにも我子大事と育るは。やつぱり可愛い

心から。娘不便と思ふてなら。とふぞ思案を仕直して。夫の命我子の命。助てやいのと手を合せ。頼む心の一筋に。立返したる女の操。哀にも又いぢらしし。勝る憂身と

白雪の。道をたどりてとぼくと。見へぬ眼病の仁左衛門が杖を。力と頼なき。涙の程の稚子を。ゆぶりすかして。ねんころゝんや。ねんねが守はどこへ往た。どことは爰よ。小柴垣。ム、降は。かてとくはへてけふの寒さ。ム、さむ。おれでさへ是じや物嘸坊主

66オ

めが寒からふ。ヒ、さぼんよ。追付鼻が溜乳を吞してやるぞよ。ほんに胴欲なは兄者人。済ぬ事が有にもせよ差当る孫が難義。余りな我俣気随。ハ、胴欲な人で有と

つづやき。立寄戸口。おきのも声ひくう。兄の手前を憚りて。闇に礫の音

信も慥に夫と表の方。立上る裾しつかと押へ。ヒキ娘。何きよろしくするぞいやい。キハ
私はな。半次郎に逢たいか。ハ、ヒキやい。最前から仁左衛門が声。聞耳潰すは親の慈
悲。但しは引入左衛門へ手渡しせうか。ハ、ヒキ。夫悲しくば追返せと表へ響くつこと声。聞
取表の仁左衛門が。ヒキ兄貴。ほんにこなたはむごい心じやのふ。子中なした夫婦合引分る
66ウ

無得心。あいそもこそも尽果たはいの。向後こつちから縁切たぞ。おきのもそこにあるそふ
なが。子を子と思はぬどう畜生。ヒキ泣なく。兄貴と縁切たれば我との縁も是切
じやぞ。いとしいは弓助殿。乳呑子かへ屈強な男の。うろくとさつしやるがおりや悲しい。
どふぞして育たいと思ふから。あつちこつちの貰ひ乳しても。かぶり振て吞付ず。

あつちくと泣てばかり。といふて見殺しにせうよりは。澗川へでも身を沈め。此子と手を
引死出の旅立。とはいへ不便や可愛やと。甥子を思ふ真身泣。内には母が泣
くつをれ。正体もなき。其風情。外面は猶も。降しきる。雪に其身は濡驚の。翅こ
67オ

ゆる仁左衛門が欠出しても。後髪行つ戻りつ心は千々。乳たいくと泣出す。我子の声に
かけ寄おきの。とむる親の牛頭馬頭に。泣音血を吐うき思ひ。仁左衛門は涙声。ヒキ兄
貴。是程利害を解ても聞入る気はござらぬか。ヒキ此半次郎は。こなたの娘が産
だ真実の孫じやぞや。サア尤でござんすかはな。もふく何にもいふて下
さんすなく。ヒキ云にやならぬ。無得心なと云ふか。道しらずの情しらず。こなた
も前は手一合も取たじやないか。夫でも武士の果か人間か。ハ、聞へぬかいの。此
様にいふのも半次郎が可愛さから。賀殿は内へ入ず共。此子計はおきのが手で。

67ウ

育たして下され。ヒキ慈悲じや。情じや。頼みます。ヒキ是程いふても返事のない
は聞入ぬ気か。是非に及ばぬ。是迄の命じやと思へは済。此礼は未来から急
度云ます。さらばでござると仁左衛門が。覚悟極めし其一言。おきのが胸に釘

針を。打るゝ如くこらへ兼。ヒキ申伯父様。必ず早まつて下さんすなへ。ヒキそふ思ふ
なら爰明て。たつた一口飲してたも。ヒキ夫でも。明ずは死ふか。ヒキ夫は。ヒキも内と
外。親と伯父との中垣に隔る憂は身一つに。地獄の呵責受るか。身を打伏

て泣沈む心ぞ。思ひやられたり。太郎助は大あくび。ヒキ聞たふもないよまい言。

68オ

ほつとりと退屈した。ヒキ浮世じやな。親の心子しらずと。嘸鬼のように思ふてあるが
おれが心はヒキ此自在の竹。とつくりと思案せいと藪から棒の一言は。心有げに見へ
にける。いぶかしながらさし寄て。ヒキ此自在の竹を。お前の心と云しやんすは。ヒキ。
心の内の善悪を。割て云ぬが互の秘事。おりや奥へいて罪亡し。祖母が速
夜の回向せう。とつくりと思案仕や。ヒキ表にあるどう盲もきりく帰れと

にくていに。いふも血筋の暇乞胸に。包て入にける。始終表に仁左衛門か。聞取兄
の心の底意。探る盲の一思案。心に黙き稚子を。そつとかたへに抱おろし。爰に

68ウ

捨ると白妙の。吹雪を防ぐ菅蓑を着せて其身は背戸口へ忍び行とはしらざるおきの。心を奥に気を配り。我子にちよつとあいの戸を明に立のも忍び足。伯父様。まだそこに居やしやんすか。半次郎は寝てゐるかへ。伯父様といへど答も音せぬは扱は死にか悲しやと。あたふた明る門の口。わつと泣出す稚子の。声に驚き走寄。さ半次郎か。ムゝかはひやく嘸ひもじかる。寒かふの。どこもかも氷の様に。此さ冷た事はいのふ。せめて焼火で肌をと門の戸。引たてとつかはと内へ囲爐裏の傍に寄。乳房ふくめて我子の顔。やゝ打守り目に涙。

69才

襖一重に親太郎助。念仏の声も高くと。鉦打鳴し。南無阿弥陀仏。ムゝと様。何ぼふ其様に手を合し回向さしやんしてもな。子を子と思はぬおまへの邪見。何の後生になろぞいな。何にもしらぬ此半次郎。むゝい親じやと子心に恨でも居やらふが。母じや物子じや物。何の如在か有ぞいの。なむあみだ仏。定てこちらの人弓助殿も。水くさい女じやとさげしんで居やしやんしよが。是には深い入訳が有ての事でござんする。ほんに死しやんした鼻様が。息災でござるなら是程には有まい物。いとしい夫子に苦勞さす。わたしが心のせつなさはどの様に有ふ69ウ

と思はしやんすぞいな。南無あみだ仏。涙ながらに以前の自在。手に取上て打詠め。わしが心は此自在。思案せいとと様。心有げな今のお詞。竹は直なるおしへの詞。夫の謀叛に従類迄死罪遁れぬ世の掟。可愛と思ふ此子にまでかゝる罪科の命は一つ。自在によそへし女の操。立るは夫の身代りに此半次郎を手にかけて兄様への命乞。ムゝ願以此功德平等施一切同発菩提心。大事に育はごくむが。子を持親の慈悲なるに。夫の為とは云ながら現在我子を手にかけて。殺すといふは情ない。いかなる過言の報ひにて敵同士が親と子に。生れて70才

来たかとくどき立。■に抱しめ抱きしめ。涙の限り声限り前後。ふかくに見へにける。歎きを余所に爺親の。声せはしなく娘々と呼立る。ムゝそこへと云つゝも。名残おしかの束の間も。離れがたなき憂別れ。思ひ切てぞ入にける。既に其夜も亥の刻過。主は誰共白雪を踏分。ムゝ此家の軒。窺ひ寄たる一曲者。門の袖壁難なくも切抜手垂さし足拔足庭先の。雪かき分て手頃の石。取て引

退出す箱。小脇にかい込ゆうと。出行大胆一間より。さゝ信州の城主武田四郎勝頼が嫡子太郎信勝。久吉の旧臣福嶋左衛門正則討取たりと呼70ウ

はる声。聞より信勝忿怒の勢ひ。頭巾かなぐり大音上。さ甲斐源氏の嫡流武田太郎信勝。目前に有ながら討取しとは何のたは言。但しは武勇に恐れしか。死地に入たる福嶋左衛門。観念せよとかけより。一間の障子蹴放せば。内に勇備の其骨

柄。首桶携へ欣然たり。はやり切たる太郎信勝。いで一討にと抜放し切かゝるを無
刀のあしらひ。納戸の内より女房がそのふ待てと走出。さゝへとむる柵の。心も雪
に隔のかせ。さ妨するなど引退て。猶も付入信勝が。目先へさし出す首桶の
ねふるがごとき我子の切首。一目見るよりさしもの信勝。五体に盤石打るゝ
71才

役目はちいさい時。別れた我子の福嶋左衛門。南無三。聳と娘が縁の切目。
譬何程聳殿が働いても。多勢に無勢籠の鳥。廻りて孫子に

も。どふいふ難義がかゝらふやらと。追出したる無道心も。つまる所はかはい
さ故。ニヤ兄よ。武田の余類の此親仁を討取たら。我が役目は済ふ

がな。聳殿ではない信勝様。どふぞ爰は了簡して。無事に別れて
下さりませ。聳と息子が切つはつつ。何と詠て居られふぞ。いづれが討

れ切れても其悲しさはいか計と。三方四方へ身一つを。切て投出す
71ウ

年寄氣質おきのも俱に正体なく。現在我子をあいそもなふ。抱取

ぬのも其子か可愛さ。謀叛人の余類の者と。もし頭はれたらとゞ様や

私は。十成行にあふ兼ての覚悟。嘸最前はむごいつらい胴欲な女

じやと。お腹が立たでござんせう。伯父様赦して下さいと。始めて明

す親子が誠。聞仁左衛門は大声上。ハ、兄貴こらへて下され。そふとはしら

す生畜生の。情しらずのと出るまゝの悪口雑言。恨んたがおりや

恥しいの。ニ益体もない。そなたが腹を立るのも。やつはり

72才

助得させよ照重と。遠無双の名将も。子故の闇の御迷ひ。主命是非なく。何

卒廻り逢事もと。惜からざりし命をながらへ。扱こそ斯は成果しと。始終りの物

語り。無念の父が最期の次第。聞信勝が口惜涙。心を汲で左衛門正則。こゝ

誠に過たる物は及ばずと。武に秀たる屋形の一族。尸は衢にさらす共。武

名は四海に。芳しし。実いさみ有御物語り。思はず感涙致せしと。仁恵厚

き勇者の詞。照重涙の顔ふり上。こゝ何事も夢の世の。覚て此身は

桶屋の太郎助。信勝様ではない聳の弓助。娘おきのへ似合の縁。三々九

72ウ

度の盃も。やつぱり尽せぬ三世の縁。勘当に事寄て。可愛い孫を突付。心強ふ

追出したは。子に引さるゝ親心。短気な心も出まいかと。胸を痛る折も折。討手に来た

は我子の左衛門。首討て渡そふと。受合心は此皺腹切て兄への命乞と思ふ心は知ざる

仁左衛門。恨の■■々聞せつなさ。自在の竹になぞらへて。娘の言訳。解負せてこ孫を。

手にかけて娘が健気さ。誉てやつて下されのふ。とはいへ一人の初孫を。殺せとおしへる此
親は。三千世界を尋ても又と独有ふかと。空しき孫が切首を顔に当身にそへ

て。取乱したる。血筋の涙。こらへ兼て仁左衛門は。小陰より転び出。ニ兄貴。誤りました

（）

73才

はいの。そふいふ心と露しらず。こなたや姪への頼当に死でくれふとさつきのだら。深い様子が有ふぞと。思ひ直して半次郎を。可愛そふに門口へ。捨ては見たが気にかゝり。裏口から忍び込。始終の様子聞度に。此胸が裂る様にござつたはいのふ。親に譬し兄者人。畜生の獄卒のと。いふた此身が面目ない。赦して下され赦して大声上て泣叫べは。おきのはいつそ正体なく。まさ私も悲しいはたつた一人のいとし子を生先も見ず親の手に。かゝる憂目にあふぎの別れ。時もかはらず日もかはらず。と、様迄に死別れ。私が心のせつなさつらさ。推量してたべ伯父様と返らぬ諄かぞへ立。

73ウ

くたる三人の涙。恩愛節義に誰々も俱に涙の雪解や落て流て。谷川の水かさ増る如くなり。やゝ落涙の太郎信勝。涙払ふてつつ立上り。我に所縁の太郎助と知ぬながらも主従が。再び結ぶ互の因。則父の御筐家に伝はる錦の

簾。義兵を上る印ぞと自在の。竹にかけ流し。勢ひ込だる其有様。見る太郎助が心の笑。左衛門正則を糺し。我幼少より幾許の厚恩謝する間もなく。不孝の罪の御侘は。稚き者が此切首。又武田に所縁の親人の一命を給はりしは。百万の強敵を討取しより遥の誉。尺恩の寸孝ながら。亡親人や従弟が為。此

74才

福嶋に一字を建。妙なる法の道広き。徳は百億大無辺。心を取て妙徳の。二字を其まゝ寺号と定め。導師は血筋の伯父者人。其介抱は妹尼寸心得たるかと左衛門が深き情に伯父妹。重々厚き御志し。受るもやつぱり仏の導き。畸人と成し業因の。未来も猶更恐しい。徳偶の縁をもろ人に勧る功德は此身の為。又百羅漢を建立し。末世に残す物ならば。なき人々の菩提ぞと。詞

は居間に歴然と上福嶋に名も高き。龍王山。妙徳寺と。残るも

法の。威徳なり。左衛門重ていかに信勝。此場は無事に別るゝ共。又の再

74ウ

会有時は。互に晴の勝負せん。何さ。愛かしこに徘徊する武田の余類をかり集め。父勝頼が吊ひ軍情は情寇は寇。心得たるか正則と。弓矢の表敵味方。名残は尽じと太郎助が。諸手をかけて引廻す。修羅の向ひの四苦八苦。今が別れかと縋るは娘すゝむるは。弟が回向の六字詰。六つの巷に迷ふ子の。いとし可愛も夢の夢。覚ゆく花の色かへて身はそき尼の墨衣。しんは泣寄なきからを見おくる野辺のいとなみ

も。なみだしいとま乞。果しなく両将が別れて(三重) 出て行

75才

八冊目 耳塚

金時が。熊を押へて斧持て。城や裾野の松林。義経弁慶渡辺の綱。唐の大将誤らす神

功皇后武内の臣。軍人形やよしあし粽菖蒲刀やあやめ草。調ふ小哥も媚る。洛東

阿弥陀が峯の麓なる。大仏の門前に新に築く耳塚を。前代未聞と参詣群集。櫛

の齒を引ごとく也。往来も暫し。とだゆれば。爰かしこより非人共。一つ所に寄こぞり。何と六よ見たか久吉様といふ人はゑらい人のふ。今度唐を攻にいた土産に唐人の耳を取て戻つて此下へ埋てあの様な五輪立て。一分を立さしやつたのじやはいの。キ又ちよこ才な大領様に刃向ふとは。小頬にくい毛唐

75ウ

人そんなやつを塚にする事はない。耳取たら鼻かんで仕廻しやつたがよいにのふ。イヤ耳取て鼻かんだら戻る事がならぬはいの。夫はどふして。ニ鼻かんで道中が成物かいの。あほう口たゝかずと。貰ひ溜の集銭出し河原で一てう入てこふ。きこいと打連立かしこへこそは。歩行。商人の宝を算盤とし上口を養ふといふ夫には違ふぐだ右衛門。高いきズウ右衛門丁児長之助諸共。大仏前の耳塚伝ひ挑灯片手に歩み寄。さ男共非人めがどぶさつてをるか見て参れ。心得ましたと二人の男。ふるひ中風が夜這の如く。小屋近くさし寄て。とくつく見届立帰り。高軒かきちらしどぶさつてつけつかります。ニ重畳。キズウ右衛門殿。こなたが云つしやる

76オ

には。此大仏前にゐる女の非人め。つゞれは格別着ている物やまき迄が値打物との事。片腹いたい。今時の乞食が値打物持て居よふ筈がない。引摺出して吟味せんと。勢ひ込で欠出せば。ズウ右衛門しばしとどめ。貴殿と拙者が詞の論。日頃こなたか目利自慢。ゑらいとたつた一人よばらつしやるがせんすり所。非人めが不仕合せ。寝込へ仕かけるもあまり不躑。とつくりと目を覚させ改たが能ござらふ。こゝと欠寄口々に。非人め。粥やらふ目を覚せん。粥やらふ。粥やらふ。ニ口々嘘ついてひだるがらすな。ニ非人。そちを爰へ粥やらふと謀つて呼起したは余の義でない。見れば真裸。幸そちがゆもじが貰

76ウ

たい。ハ、キゆもじがほしい貰ふたぞよ。ニ其様にわしがゆまきを改めふと云しやんす其訳はどふでござんすへ。き。此ズウ右衛門がいふには。そちのいもじ中々値打の有切とにらんだ所。又是なるぐだ右衛門殿は。何の役に立ぬ継切と。互にせり合詞の争ひ。其故其ゆまきはづして値打に入たいはいやいと。いふに非人は横手を打。そふ云しやんすりや思ひ当る事が有。成程此いもじが値打の有事もござんせう。是がはづされうか。私もまんざら腹からの乞食でもござんせぬが。悪性故に仕損ひ。今此なりに。成下つたれど。どぶぞま一度本国へ逝たいと。神や仏を朝夕に祈らぬ日遣は。ないかいな。まだ今朝からかたけも

77オ

喰ね共。姫ごせの嗜みと。たつた一つ残したゆもじ。どぶは是が放されふ振て世間がなるかいな。赦したもと計にて。跡は涙にくれぬたる。ズウ右衛門も目を摺赤め。ニそんならけさからかたけも喰ずにゐてさへ。其いもじが放しとむないとは実尤。ニ不便やいぢらしやと。目をしばたげばぐだ右衛門。さかたけ喰ぬといへばびんの口でも通る。と。ぬつへら

こへらと出る俣の言訳。ならぬ。引はつせといふより早く。ゆまきはつせと双方より。かゝる男を突退刃のけ。小屋よりほり出す着類の数。青の金欄二つ身のしきしだらけ。ずんど売ますよつく売ます。て値打入ふと欠寄ば。袖からごらふじませうと。いふに着類を

77ウ

ためつすがめつ。ほんにこりや袖の風も違ふて有。皆唐人衣装はした金では買ねぬと。算盤投捨ぐだ右衛門呆れ。果たる計也。高いきズウ右衛門したり顔。何とぐだ右衛門殿。非人がゆまきを値打物と目利した此高いき。何と無理ではござるまいがの。いかにも適お目利恐れ入ました。がかゝる値高き代呂物持っている女が素性。心得ずと眉に皺非人は涙の顔を上。序ながら私の素性一通り聞てたべ。私も元は日本の者ならず。女真江のヤンエギリウといふ蜚の女。獵師仲間の立者と云れし程の器量よし。末の遂ぬあだ恋に登り詰て凡三年。何が互の浮気ざかり。登程に。咸陽宮の楼にて。夜昼なしの床入

78才

に。足の裏の飯粒と。異名を取水も洩さぬ中成しに。又同じ仲間のあんだら女といふかづきの蜚。彼男にいき付て。毎日に百文弍百文。やりも遣たか小遣ひは。大かた高に彦駄半。船に積だら阿蘭陀船。車に乗たらぬいやらさ。木やりでも音頭でもいちづても

まかなふても。微塵けもない二人が中。あんだら女大きに腹を立。忘れもせぬ八月の。十五日の名月に。腰囊ひらりと取て捨。ゆまき一つに縄の帯。股ぐらもあらはに欠来り。私が膝にふうはり。どさりと居かゝつて。ミヤンエンギリウあんまんりん。がんばとう。いけないろうと胸づくしを引掴む。こつちも一期も大事ぞと。ありきやうつちくすつちくはりめんない。とらやとあたる物

78ウ

を幸に。打めぐ打割踏砕く。悲しやとわめくやら。秘蔵の麝香が象程な虎の子くはへて欠出すやら。家守は家賃をせがむやら。玄宗皇帝以来の惚気いさかい此事唐中に。かくれなく。彼男は朝鮮責に討死したとは跡方もない赤嘘日本へ渡つたと聞てうる。此土に渡り。尋探せと有家は知ずとう。此身に成下り。後家立返す此わしが悲しい心の内太腹。思ひやつて下さんせと四百余州の姫ごぜの。因果を一つにかためても。我身には及ぶまの初対面のこな様方に。わしが素性のさんげ咄し。お恥しやと計にておろ。涙にくれければ。聞て皆々横手を打。扱は唐の幻妻か。こな様が其古着唐でこそ値打かなけれ

79才

此日本で売たら皆大金になるしろ物。売払ふて安楽に一生くらす気はないかと。聞てぞくく小躍して。ハ、そんなら何と云しやんす。此古い継の当つた着物か大金に成かいな。成とも。最前から此高いきが値打を入れて見た所が。大かい金で五百兩余り。こつちへがらりに売しやれと。聞て横からぐた右衛門。こつちへ六百兩に買ませう。ハ、ほんまかいな。貴様六百兩に買やこちやはつんで八百兩。そんなら飛で千両じやと。聞度々に驚く非人。千両との一言に呆てうんと倒れ伏高

いきズウ右衛門さし寄て。さ夫へ行は古手買か。千両になる此代物。いつくへ持て走ぞと
79ウ

呼はれば。むつくと起て。おれが着物を取か。返せ戻せといふては。躰きひよろしく。又
立寄て耳に口。さ千両じやぞ。聞てむつくと起上り。又倒るゝを大勢が心付んと口
く。さ千両じやくとそゝり立打連てこそ帰りける。かゝる折しもあまたの胴勢先を
払ふて歩くるは五つ松宰相氏里卿。桃山の御所より内勅の帰るさ。福嶋正則が招待
によつて。洛東銀閣寺へ御成と。威義嚴重に歩み来る。行烈先へばらくと。非人共か
欠ふさがり。結構な御参詣様壺文やつて下さりませと。もつれかゝれは雑掌下部
反打て声高く。さこなたを誰とか思ふ。忝くも当今の御内勅福嶋か願ひに

80オ

任せ。銀閣寺へお成の道筋。妨ひろがば為にならぬと。切刃廻せば高笑ひ。さちよこ才
な内勅呼びはり。其お公家様をこちらが仲間へどふぞとらして下さりませと。いふより早く
一同に先に進みし警古が刀。抜手も見せず切下れば。さ狼藉者遁すなど。主従
上下の分ちなく上を下へと(三重)騒ぎ立傍若無人の非人共当るを幸薙立切立追
立れば。口程になき青侍皆我一と迹散たり。跡にうろく中将氏里。長追無用と
氣をあせり。見やる脾腹へどつさりと。打込手練の二つ玉うんとのつけに倒伏。仕済し
たのこなたより。鉄砲引提ゆうくと歩出たる大男。絶入死骸をじろりと見やり。心に
80ウ

諾き立寄て。手早に脱す冠装束。追押刀に欠来る相盜。お頭まんまと首尾
よふ一人も残らずばらしました。さ出かしたとあたり見廻し乗物へ。乗移つたる。不敵
者。さ此死骸さ構はずと乗物やれごと一同にかき上る。袖はつゞれのお鞆積。供はたいなし
奴迄。対の看板薦かぶり何国。共なく(三重)立帰る

九冊目 東山の銀閣寺

更科の。月は物かは。都路の見所。多き其中に。東山の銀閣寺に。けふお勅使の御入と福嶋
が下部共。お庭の掃除はきちぎる。汗に髭をや流すらん。何と可内。けふは彼久
吉様の奥方。御平産のお悦びに。禁庭からお勅使がお立なさるゝ。其饗応を此

81オ

銀閣寺へ持込とはきつい御趣向。さ往ても遁ぬは此はき掃除。式号半には
ほつこりと凝果たはいやい。さ其様にきなく思ふな。我も追付久吉様のやうに。朝鮮か
べつ甲屋の後家様でもせしめる様に成ふぞいやい。さ今にまだ珍らしい事は。おらが
旦那の福嶋か。桃山の御所へ登城の砌深草とやらで少々お目にとまつた女が有て。

ちよびとつまゝれた所が腹がぼてれん。其子が早お十一にお成なされ。今日はへお越
との事。さ久しぶりて今宵は大かた一合戦有て有ふが。どふぞ其お女中がたつた一声。勝
鬨をお上なさるゝが聞たいな。さそんな馬鹿を尽して。奥方にお目玉貰ふな。さ

81ウ

来らふと。打連て。部屋有方へ入にける。草に育ど草ならず。おすまといへる才発者。

秘蔵息子の市松は。徒士若党にいざなはれ。歩む跡よりひよつかく。白髪親仁の勘作が。跡先構はぬ高調子。扱お侍衆いかい御苦勞。三三孫よ。常から逢たいといふ。我がかとゝ様が爰へ来て居さつしやる。大体強い人じやないぞいやい。娘も必ずおぢくすな。今は大名で有ふが。大将で有ふが。我が腹の上へ乗て。此様な孫迄出かしたじやないか。譬向ふに鼻が出来ふがそりや後連。本妻は我に違ひはないは。今迄ほつておきやつた恨。

82才

名代喧嘩も出来まいぞい。ンノ、エ、とゝ様とした事が。侍衆も聞てじやそんな事云しやんすな。三三皆のお旁。在所で気俣に育つた人。必ず笑ふて下さんすなへ。三三痛入たる御挨拶。何にもしらぬ下郎共。お目かけられて下されふならば。有難くごはりますでごはりますと。尻もつ立て蹲る。勘作はしたり顔。三三貴様の方から。そふ出りやこつちに一言もないでゑすじや。きく皆休んで貰ひませう。ほんに太義でござりました。

休んでやいのおすまが挨拶。聞より三三下部共。門前さして急ぎ行。勘作は切戸口。外よりうそくさし覗き。娘見たか。何と三三奇麗な所じやないかいやい。二階は82ウ

きらくと門徒宗の仏壇同然。三三内方にござりますか。深草の勘作が参ました。旦那様は留主かなと。音なふ声に更科は。一間をしづく出向ひ。聞及ひし勘作様。御息女も我夫のお待兼。きく是へとの給ふ内。勘作は遠慮なく。孫の手を引上座に直り。三三そんならこな様が。福嶋殿の今のお内義か。聞ばまだ子がないげなの。おらが娘も旦那殿のお剃刀を戴いたが。田地がよかつたか日和まんの塩梅か。三三こんな孫め出かしました。早速連てこふと思ふたれど。旦那殿もゑいやつたうの商売か■しいと聞た故。こつちも遠慮してゐる内。

83才

唐迄為業に居て戻らしやつたが七年ぶり。唐の飛脚屋の所は知ず。便一つなくばこそ。とくれくれ十一年。其間孫めに楞一本持さばこそ。頼寺のお住寺頼んで手習ひさすか。又三三丁も脇にどゑらい達人が有故。ゑいやつとうを習はすか。兎の毛で突た程も怪家させず。是程迄には育ました。所に旦那殿の方から。無事であるなら連てこいとお使故。取物も取あへず親子三人連で来ましたが。急な事故何にも土産といふてもなし。所の名物深草団。又火桶や土器の様な物が入なら。何時なりといふておこさつしやりませ。

83ウ

おらが置におろし並の置で買ておこします。三三何より角より。頼まにやならぬは娘のおすま。三三おれが本妻じやおれが本妻じやと。必ずせり合て下さりますなへ。娘挨拶せぬかいやい。三三かきたくる様に嗜つたら。ほんとりと草臥たと。褥の上に肘枕。ころりとこけし有様は。帛紗に乗た干蕪。在所育のむくつけ親父。見聞おすまは気の毒顔。とゝ様のふつかうも生れ付た田

舍氣質。其中で育つた私ら親子。どふでお気にはいらぬがち。せめてお寢間の上おろし。お手廻りの御用など。お遣ひなされて下さりませ。是はく痛

84才

入たる御挨拶。現在主のお世継■産さお前手柄者。ム、勿体ない其様に御意遊ばす程。お恥かしいと打笑ふ。斯と聞より福嶋左衛門。一間の内より立出れば。久しう逢見ぬ夫の顔。見るにおすまは飛立思ひ。積る恨の数々をいふて退ふと思へ共。傍の人目恥らいて。暫いらへはなかりける。左衛門重て。深草の勘作殿。おすまにも堅固に有しな。我子の市松対面せん。キ、愛へくと福嶋が。詞に市松両手をつき。御対面は叶はぬかと。明暮なつかしう存じておりましたに。今日のお使者有難ふ存じますと。聞て勘作自慢顔。何と智様。此親父が育がら。どんな物でござります。物もよふ書ます。算盤は多らし。ゑいやつとうから謡■。取分茶の湯は。利休さまの御

84ウ

弟子に習はして置ましたが。おらはしらぬがゑらい上手じやげにござりまするて。付ニヤ茶道にも心がけ有とは、神妙く。幸今日は御勅使の御入来。饗

応の役目申付ん必ず麁相のないやうに。随分心を付召れ。勘作には

打くつろぎ。今宵は是に一宿仕やれ。夫は忝ふござります。孫が大事の

お役目。勤負せる迄こちとら親子は。慈照寺の地藏様へ参つて来ま

せう。ニヤ孫よひだるけりや、遠慮せずと。茶漬なりと喰して貰

へほんに心が付なんだ。自が部屋へ来て。さお馴染の盃事。ハ、戻つて

85才

くる迄盃はお預け申しますせう。きく娘きりくせいやい。旦那様孫めが事を頼みますと親子はいそぐ更科は。いざこなたへと市松が。手を引連て奥と外。

引別れてぞ入にけり。早御勅使の御成とこたふる声。福嶋正則出局へ間

もなく入来る。五つ松の宰相氏里卿。伴ふ武士は三上監物。胸に工みの深

べり聾。ゆうくとこそ打通れば。福嶋左衛門両手を突。遠路の御光駕

恐悦至極と。挨拶終れば正笏し。真柴大領の満所宇治の方。平産の

内勅に立たる所。此銀閣へ来るべしと。招きによつて立越たり。過分の心配

85ウ

無用に仕やれ。ニヤ有難き御仰何を申も不骨の我々。楼に御入有て

御酒一献。ニヤ市松。御勅使様へ麁茶一服。早くくと詞の下。はつといらへて市松が。

衣服大小改めて運ぶ茶碗の目八分。畳ざはりもしとやかに。のつし熨斗目

の振の袖。父が刀の柄頭かゝると見へしがうつぶしに。どうと転へば取落す。茶碗は碎

て散乱し首尾はさんく不興の福嶋。監物は高笑ひ。ニヤ正則殿。ニヤわつばは

召使はるゝ小御■従かと思ひの外。ニヤ貴殿の御息な。行義作法驚き入ました。

中々御発明。御自慢なされ。ニヤ斯戦国の砌なれば。武術に計心をゆだね風雅

86才

の道に疎き躰。不礼の段は真平。左衛門殿ニ何と御意なさる。御子息は武芸にお心かけか有とな。監物是にて拝見致そふ。お望ならば辞退は不礼ニ市松此福嶋が覺の一腰。是をもつて庭前のニ紅葉の枝。只一刀に打切て手練の程をお勅使へと。父が差込に市松が。爰ぞ恥辱の雪き時。日ころの手練をあらはさんと歩み寄たる紅葉の元。ふり上る手もかけ声の音もはつきり。小腕のなまりか刃の業か。枝に半分切込で押共切ねば口おしと。又ふり上れば躰まで。扣へおらふとおり立正則。我子の首筋取て引すへ扇追取てうくと

86ウ

打すへて声荒らか。太切なるお勅使の御前にて。不作法とや云ん不行義千万。殊に此割たる茶碗は雪の下と号て大領久吉公の御秘蔵。故有て福嶋知行にかへ。身にかへて拝領なしたる秘蔵の一器。微塵になすのみならず。楓の小枝一本。打事ならぬ大馬鹿め。親の名を汚したる鈍忽者めと打すへ。打すへられて市松は。顔も得上ぬ面目涙庭に打伏泣計。監物は太欠扱々重々の御馳走。御子息の手の内。ニ見事な事たはい。福嶋殿人そばへの異見立見苦し。取置召れと座を立上れば。氏里も不興の体。面目なけに左衛門正則。躰か不礼は幾重にも。楼に御入有て珍らしからぬ都の風景。勅使様。監物殿ニ御案内と先に立我子に心残れ共。親子隔の銀襖引たて

87オ

てこそ入にける。跡は物音。しんと。哀れを添る鹿の音の。いと悲しき秋の空。不便や庭に市松は汐の干瀉の捨小船。よるべ涙の。顔を上ほんに思へば此身程。因果な者が世に有ふか年頃日頃祖父様の。お世話に成た

かひもなふ。勅使の御前で重る恥辱。我身の恥よりと様の顔も立ず。祖父様やか様迄指ざししらるゝ不孝の上ぬり。恥辱を取た此腕が。切て捨たい口惜い。民より育と口の端に。かゝる不孝も身の不運ハ浅間しやふがひなや。こりや何とせふとふせうと。立たり居たり身をもだへ悔歎くぞやいち

87ウ

らしし。かゝる哀れを白髪の勘作。娘の手を引いつきせき。戻りかゝりし切戸口。なむ三こりや戸がしまつて有。誰ぞ明て下さりませと。叩く物音聞市松。稚心の一筋に。顔見合しては今さらに。言訳なしと腰刀。抜手も見せず我腹へ。ぐつと突込七転八倒。苦しむ声にかけ出る更科。勘作親子は心得ずと。切戸を無理に押やぶり。門入庭先市松が。朱に染たる苦痛の体。さこりや孫よ。何としたのじやぞいやい奥さま様子はくと。親子は白洲に腰も抜。仰天するこそ道理なり。手負は涙の顔ふり上。言訳もない祖父様かゝ様。一通り聞て下

88オ

され。お勅使の御前において。と様の御秘蔵有。茶碗を割し不調法。其恥を包んと。と様の心お心づかひ。庭前の楓の枝。切取てお勅使に。手練の手の内御意に入子と。仰を請て立向ひ。切共討共刃は立ず。恥に恥を重ねる此身。永の月日の御養育。

行義作法はまだな事。弓矢打物取事迄。教へ貰ふたかひもない。一世一度の晴の場所。仕損じたる口惜さ。言訳なさに死まする。怪家で有たとと様。詫してたべと計にて跡は詞も泣入ば。勘作は大声上。道理じやく尤じや。さぞ無念に有ふ口惜からふ。が去ながら。どんな強い侍でも。軍に出れば時の運。負る事も勝事
88ウ

も。其時折の身の不。そんな事を気にかけて。死でしまふといふ様な短気な事が有物かいやい。そふでござんす共。聞へぬは正則様。我子の事じやないかいな。是迄荒い風にさへ。当ぬ様に育た此子。打物わさにかたまらぬしうをくろめて下さつた迪。まんざら罪も当るまい。刃にかけて殺さふ迪。はるく連て登つたかと。思へば身も世もあらぬと。我子に取付声を上わつと計に泣沈む。我子の最期と聞よりも。襖あらはに福嶋左衛門。手負の傍にさし寄て。太切なる晴の場所を仕損じたる誤り。恥を知て切腹とは。出かしたく。遣は父が子
89才

成ぞと。介抱他事なき夫に縋り。氣強いぞや我夫。お前計で。義理有我子を殺しましてござんすかいな。其恨は去事ながら。我子の最期は覚悟の前さ。切腹させしも我計らひと。皆迄聞ず勘作は。左衛門が傍に膝突かけ。これ賀殿。賀様め。今孫めがいふを聞ば。木の枝を切損ふたとやら。又大事の茶碗を碎たとやら。こな様の身上で。何の茶碗の十人前や廿人前。碎た迪何事が有ぞいの。それ程大事の茶碗なら。焼継にやつても濟さふな事。扱も。侍といふ商売は。胴欲な商売じやのふ。天にも地にもかけがへない子を殺して覚悟の
89ウ

前とは何のたは言。其訳云しやれどふでござる。それにこそ子細あれ主君大領久吉公。名古屋御凱陣の砌。何者共しらず御乗物へ。鉄砲を打かけしが。世上の騒ぎと深く包隠すといへ共。今は命終にかはる由。是を治するには巳の年巳の日に出生せし男子の生血に。慈補の薬をまじへ用ひなば。即座に御全快なると。典薬の教へに任せ。則某に此役目仰付らる。君命とは云ながら。科なき者の命は取れず。いかはせんと肺肝を碎く折から。思ひ当りし物が年支。天の与へと呼寄しが。是迄数度の戦場にて。敵の五十騎六十騎
90才

只一刀に切取しも。物の数とは思はざりしが。遺骨肉恩愛の盼が命討かねて。なまくら物の刀を渡し。恥辱をあたへ切腹させんと。あざとい父が方便をば。誠と思ひよく死だ。腹切た。忠義者じやと突かくる。涙吞込で。始終を悟る爺親の。詞に手負は目をひらき。嬉しい。祖父様か様。今のお詞を聞てかや。切た刀はなまくら物。無念な事はござりませぬ。死だ跡で爺様を。恨んでばし下さるなや。忠義とやらに死るのは。侍の習ひじやけな。とはいふ物の。お名残惜いはと様か様。ま一度とつくりお顔が見たい。お暇乞がしたけれど

90ウ

もふ目が見へぬ。祖父様じゆつないく。もふ物いはして下さるな。苦しいわいのといふ声も。次第に弱りたへくと。おしや奮に置露の消てはかなく成ににけり。わつと計に二人が。死骸を中に取乱し前後正体なかりしが。狂氣のごとく勘作が。空しき體を押動かし。孫やい。ハ、智殿もふ孫は死ましたはいのう。今端の際にせめてまあ。今一度物をいふてくれ。不便の者や可愛やと。抱きしめく身もだへしたる叫び泣。娘はいつそ泣くづおれ。ほんに常からおとなしう。明暮爺様を恋こがれ。逢た其俣此様な。はかない別れをするといふは。々

91オ

よくく薄い親子の縁。きざ。こんな事なら此跡の。大煩ひに死おつたら。諦め様も有ふ物。刃にかゝつて死るのは。非業の様に思はれて。一倍悲しいぢらししと。声を限りにくどき立大声上て伏転ひ。歎けば遺正則夫婦。恩愛死別の憂涙。涙くはもろ袖に満くる汐の荒磯や浪立騒ぐ如くなり。正則心取直し用意の。器たづさへて。我子の死骸の傍に寄。顔を背けて疵口より。取出す精血誰くも。又くりかへす。面涙。左衛門制してさいづれも。返らぬ繰言不覺の至り。犬死ならぬ躬が死骸。せめて仏間で密の回向と。差図に是非も三人か。涙ながらに

91ウ

亡骸を。いだきかゝへて奥庭へ伴ふ。六字六道の。地藏和讃を野辺の供。帰命頂礼地藏尊釈迦のふぞくを。おく念し。悪趣に出現仕給ひて衆生の苦患を導けり。導く涙の露雫。■し涙の奥と口引別れてぞ入にける。秋の夜の。虫の声さへ。物凄く音にぞ寄か。白浪のしづく出る勅使氏里。窺ひ寄たる二人の力者。弱腰しつかと組付を。直にほぐれて頭転倒。奥は舞曲の打はやし。笛のひしぎや矢がらしめ。左右一度にどつさり。打込太鼓鼓のしらべ。乱れ調子にしがみつ。二人が衿がみ驚づかみぐつと一しめて転八倒。絶入死骸蹴飛し。己が自業を松虫の。マへ

92オ

声のやさしやと。そらさぬ気色次の間より。うそく出る三上監物お頭が声が高い久吉目を討取んと勅使と成て入込しに。日外の鉄砲疵にて九死一生とや。此上は正則が。忠義にて調へたる金船の妙薬。我利腕の刀疵。本復さする我手段。其一葉は。ハ、深く包て此楼へ隠せし様子。其方は片時も早く。忍べくと追立やり。其身は又もゆうくと。納る胸の広庭づたひ。白砂蹴立出て行。始終こなたに立聞おすま。襖をそつとさし足拔足。さ今の勅使の詞では。太切のあの薬。もし盗まれては我子も大死。夫の忠義も水の泡。そふじやくと帯引しめ。かい敷も

92ウ

楼へつゞいて登る庭先へ息を切て物見の軍卒。味方の大變御注進と呼はるにぞ。追取刀に左衛門正則。さ加嶋忠蔵。味方の変とは氣遣はし。何とくさん候武田四郎信勝。南禅寺の山門を陣所と定め備へを立。桃山の御所を攻

討んと。手勢すぐつて一千余騎。二手に別れ魚鱗の備へ。宛も破竹の其勢。

御用意有て然るべしと申捨てぞ引返せば。さ聞捨ならぬ大事。いでぼつちらしくてくれんず。かたく出馬の用意有といふより早く。鎧投かけ小手脛当。六具にかたむる忠義の金鉄。十文字の鎧引さげ飛が如くにかけり行。心ならずも更科

93才

が胸の早鐘陣太鼓。嵐に連て。動揺せり。勘作はうろく眼。申く更科様。晴

ない又どんちやん。爰へ軍が来ますがの。そしてまあ此おすまめは何所に居をる事じややら。智殿が切つはつつ。う、怪家さつしやれねばよいがのふ。軍の留主といふ物は。きつう気のもめる物じやのふ。う、中。狼狽る所じやない。幸の楼より軍の様子を合点か。我も勝利を遠見の用意と。小棲引上りしくも。欠入更科勘

作は。震ふ膝ふしわくせきと登る。二階の楼作り。上には監物件の一葉。安々奪立退所。やらじとさゆる女の非力。さ面倒なと抜打に。切込刀受流し。あし

93ウ

らふ無刀のあら悲しや。肩先四五寸切下られ。うんと倒るゝ其隙に。三上は遁れ逃て行。すれ違ふても白髪親仁。此体見るよりかけ寄て。う、娘おすま

やい。誰此様に切たぞと。いだきかゝへる介抱に。むつくと起て。さ、様か。遅かつたゝわいな。う、扱は今の侍めが所為じやな。う、かてゝくはへて智殿は軍に行れる。う、う。ご人声の其中に居やしやるといやい。さ、ご夫は刃の中にか。う。心元なや気づかひと。よろめきく高欄に。手をかけ。見れと見へ分ぬ。黄昏時のおぼつけも。深手に苦しむ其有様。う、其様に気をもんで。必死でくれなよと。いたはり歎く親心。智

94才

も氣遣ひ。娘も氣遣ひ。餌にひく。鯨波。心も空に延上り見やる四面の山々は。早精霊の送り火や。あら精霊の手向かと又思ひ出す憂涙。なむ妙法の法

の道。照させ給へと手を合せ。是や弘誓の舟岡山。かしこは数万の挑提松明天をこがすや己が身も。爰にこがする憂涙。共に泣々郭公。血を思ひ親と子が哀

を。爰に(三重)梅が香に。暮をとへは春の月。頃は秋来ぬ。空なれや。嵯峨野の奥の山深く。葎の宿のいとさびて。菩提の金の物かいと。鳥の音ならで勤経も。浮世の塵を掃捨る。庭に。奴が鬢鏡。髭の塵より己が髭。つづばる箒のやりおとかい我名を

94ウ

何と夕栄の。誰とか。人は白浪や。胸に無量をひたる左衛門。跡に三上か引添て帰る。我家の軒近く。夫と奴の力平が。小腰屈て出向へば。新参の力平花壇の掃除太義。時ならぬ梅花と云。庭に色増此牡丹。そちが心にいかと思ふや。是は又元生帰る事も人に寄ます。高が式合半のもつそう奴。何の差別がござらふと。人を見下す三上が一言。力平は苦笑ひ。成程三上様の仰の通り。雲助同然に渡り奉行致す下郎の義。いろはのいの字も知らないでござります。併御主人のお為に御返答致さないは返つて不礼かと憚りながら存じます。う、我が先生へ何ぞいふて見る心か。我か。う、面白い。さらば聴聞致そうかと。ひやうまづけば縣

誓して

95才

ふ扱いらざる事に無益の問答。彼めしや迎米くふ虫五分や七分の魂がなくちや叶はぬ。力平キハゴトふじや。と打解し。詞にミと両手をつき。梅や牡丹の時ならずしてケ様に盛りを見せ申すも。山陰の御浪人も時待ずしてでつかちない御立身なされんとの御前良かと存じますると才智の即答。キハ主家を寿く当座の答出かす。キハ三上大蔵其方は是より直様件の手番ひ早く。然らは万事は。ふ扱詞多きは品少し。早く行きやれと追立やり。何角心に打諾き其身はしづく房の内。障子一重に。勝姫君。御経読誦の声澄て。無常を添るりんの音。つき■なければ奴の力平。ミキ部屋へ往て休ふかと。立んとするを。待々。其方にはまだ用事が有。キハ勝姫殿。其様に仏間へ

95ウ

籠り居召るを見るも気の毒。暫時の積鬱き爰へくと音なふにぞ。今は胡国の捕れと。形も。容もそぎ尼の。いと殊勝にも。立出給ひ。縣様には只今のお帰りと。嗚お芳れと詞さへ世にぞ難面御身の末。見るめいぶせき風情也。左衛門ほくく打諾き。花の姿をそぎ尼とは無分別の第一。殊に胎内には久次が種をやどし。尼道心とは曲がない。身が■くの執心。けふは是非とも抱てねはんの御入仏。キハゴトふじや。と目を細め。顔に似合ぬ色好み。聞もうるさく勝姫は珠数打払ひ。無常世尊も其昔。阿難に太子かはしまし。恩重経を説給ふ。又切利天にて安居の法を説給ふも。皆孝養の為とかや。女は五障の罪深しとは云ながら。頼有草木も土も

96才

皆仏体と聞なれば。亡我夫の菩提の為。又一つには此身の後生。助らんと思ふより外望なし。あら勿体なや恐しし。赦し給へと袖打払ひ。立退給ふ姫が首筋鷲掴み。さ胸悪いよまい言よし。さ力平。姫が■首打放せと。せき立顔色力平押留。ふ扱お旦那夫は御短慮。恋は木折に参らぬ物。初奉公の下郎めが手柄初に此恋且那へお取持致すでこはります。さ其方が見事此恋を取持かよ。無常に堅し尼御の城郭。落城さすは心のかけ引。キハ落城さすとはよくいふた。返事を待は奥の別間。力平後にと主従が恋の棧橋か得ぬ。姫を伴ひ奥と口引別れてぞ入にける。花園の。小蝶をさへや下草に。乱れ初にし。我涙。露てふ物か袖に降。花に小蝶の浦山し。にくや番の蝶の羽の

96ウ

菜の葉にとまれ。とまれ菜の葉に蝶々よ。さつさ笹豆弁長が。まん丸天窓は満月。かいや片われ月の我思ひ。乱れ乱るゝ妹千■。肩に梢の短冊も。今は仇なり是なくば。忘るゝ事の。有かないか。おてゝこてんキハすてゝこてん。天のこんずや笄の。はいしいどう。お手馬お手医者。按摩けんへきはりこの顔や■違ふ。しゆくしや結ひに笹結ひ。おきやがり小■師。振鼓。ちつぽく。たんほ嫁菜。土■心づくしも化野の乱心やキハ風羽かへしひらく。小蝶の夢のはかなくも。狂ひ。廻るぞせひもなき。身のうさを払ふは法の玉帶。思ひく■染や。床の衣もひとへ成。瓢たゝきて鉢たゝき。見るより弁長走寄。キハしやれたり茶笥

売。悪体の故事来歴が聞きたいな。夫こそ我が好む所。あらく申述べしと。詞揃へて立ならべり。■茶筌にふり

97才

立る茶は元来にも有らず又。草にても候はず。彼唐土の名医と呼。耆婆が墓所に初て生立。二万二千の茶能有て現世の病を助るは是。則未来の苦患を救ふに等し。扱又此瓢箪は。腰にしやんとかつ付て。走れど飛どふらくと。こけぬが奇得年寄の則守は是なりと。弁に任喋りける。扱てもしたり語つたり。迎もの事に此お娘。少し心は空蟬の。衣の役に教化をば。頼は二人へ渡した。浮れくて弁長は。かしこへこそは走入。千数は二人か顔打詠め。面白そふな今の跡。迎もの事に私があとを打程に。心得侍ふ也。扱々結構なるお茶ちやの茶筌。かき立吞せば。いか成ばん茶も泡盛の酒甘露か薄茶に濃茶。其濃茶こそ仏さへ。もとは凡夫の思はくに。恋の継を結んでは。■涅槃の長枕。

97ウ

かはさんしたと聞物を。そりや誰が。其枕こそ思ひ有。一夜の契りに百年の。命も今は絶なんと。筐の筆のあだし事。西方鳴原へ。三まい肩で行雲の。雪の素足の八文字。毎夜出口にわしや橘の花の契りの情しる。其主様に逢せてたべ。逢れぬ事かと諱立其俣そこに狂ひ伏。扱は恋故心の乱れ。いたはしさよと巻筆が。袖に露置女気の。俱に道理と左馬助。傍に落ちる短冊を。手に取上て。かはるなよけふ解初し下の。ながき契りや幾代経ぬとも。と吟じ返して扱こそ。此女こそいつぞや筑紫の旅館において。大内の使と偽り雄龍の劔奪取たる御太刀の盜賊。奥へ踏込劔の詮義。成程く私迎も難波において奪取れし勝姫様。慥此家におはする由。詮義の為此姿。御用意

98才

なされ清明様と。嗜む一腰銘々にさしかためたる互の忠義。千枝はむつくと起直り。扱はあなたは清明様とかはり果にしお心故。心の迷ひとときまきと思ひ悩めてたりしが。よふお顔を見せていと。縫り付て取て突退。さ情は情恋は仇。四海の科人女なれ共用捨はならぬ。き御太刀の有所白状せよと。いふ顔を。や打詠目に涙。父上共母様共。たつた一人の兄様の御差函に。何の心も情ない過し別れの其後は。何を便りに泣明し。女の智恵の浅はかにも。賢気違ひと姿をなし。吟ひありくも主様にどふぞ今一度逢事の。あられぬ私が憂思ひ。神や仏のお情に。二度廻りうどんげの花の奇縁のいかいもなふ敵同士と妹と背の。中を隔の罪科は。此身の因果と計にて身を打ふして泣沈む。遺互

98ウ

の忍び寝に。枕かはせし不便さの。思ひにとかふ詞なく。暫しためらいあたりしが。巻筆心汲取て。目の形は動に頭れ。人の心の善悪は時極つて預ると曇ぬ詞に心の誠見届ても。詮義は済ぬ兄様の身の上。互の約束反古に成か但し又夫婦に成かい一味の白状。も兄様の身の上をいふもうし云ぬもつらさお前の心。女は相身互とやら望も願へ盜賊の。き詮義といへはおもしろい何事も此巻筆かそんならあなたが此縛を。千枝様と突やられ。まい巻筆殿。扱詮義の鳥にす。きせいては事を仕損じのない内に。千枝様と突やられ。

今更猶も面ふせ。夫と推して左馬助。心に黙き目にしらせ吞込巻筆楯取て。伴ひ入や入相の鐘かうくと

99才

物思いふ。秋の夕暮黄昏を。己が時刻と三上大蔵。木陰を忍び。出合頭。伯英様。声が高い。陳南慶。申付たる通りすはといふ■件の手筈は。狼煙を相図に味方の諸軍。かけ付ますてこさります。よし又其方に申付る用事有近ふと耳に口。ム、正清弟左馬助めか此所へ。近寄てたつた一討。必ぬかるな。合点かと。打合て兩人は別てこそは忍び入。心も別に巻筆か姫を伴ひ鱈の口漸遁れ出行先。とつこいならぬと大蔵か。■る手垂ひるまぬ忠義。さ毛二才殿邪魔仕やんなど。姫を匿ふて摺抜る。そやはさらぬと引戻す。松のふし気の葉くれ聞。こなたはかよはき葛。姫が詞の助太刀に。互の手練前がはに。取付腕首肘落し。

99ウ

たるむ所を棲かへし。つてんとつさり大蔵か。ひ腹をうんとさ打たり。■此隙にと巻筆が。姫を手を引逸参にこけつまるひつ通行。いつく迄も大蔵が。踏出す足のこなたより。飛鳥の如く奴力平。かんつか搦て投付れば。ひるまぬ家武者起上り。さちよこ才な毛野郎めと。切てかゝるをかいくり腕首取て引かづき。前なる井戸へ此世の暇。始終見届左馬助立寄て思ひ寄ざる森尾殿。扱貴殿にも此所へ。下郎と成入込しも劔の詮義一つには。姫の御守護いたさん為。出来たり。此上は兩人か心を合して御太刀の詮義。実尤と互の秘事。千枝は夫と走出。お胸欲な清明様。お姫様と私とを一つに落して給はらぬ。兄と一つでない事は大■推量してゐ

100才

はれ。お胸欲なと託言。さ詞■すも武門の穢れ。帯刀殿片時も早々。合点と行先を。ふさぐ千枝を帯刀が。引退れ共恋路の闇。柵む継清明が。用意の取縄。柱にしつかと情のいましめ。さ是从からは此家の主。召捕て帰国の手土産。帯刀殿心得そふと勇立。奥の間さして忍び入。跡に不便や憂事の。■る千枝が。心のほむら。扱は勝姫といふ女こそ。清明様の恋人ならん。女のわしに恐しい謀板とやら望で何にする物ぞ。とはいふ物の。皆兄様の欲心から。ひよんな事をば思ひ立。妹迄に此うきめ。見するが兄の役かいのふ。又清明様も聞へませぬ。つらからば只一筋にといふ物をなま中一度のお情を。受しが因果此身の業。お姫づらがな

100ウ

いならば是程つらふは有まいにと。思ひ違ひも煩惱に燃るほむらの忽ちに物狂はしき其有様。此いましめが解てほしい。解ぬか切ぬか悲しやと。身をあせる程しめからむ。そふじや。時計に仕込し狼煙を上げれば集る一味の人々爰へ呼寄此縄をそへじや。と。女心のあどなくも。さし足拔足漸。傍に差寄て。我身を横に傾の時計。はつたりこける其はづみ。解て遁るゝいましめ縄。嬉しさはさ煙くと立登たる相図の狼煙。忽響く責太鼓。胸はとくゝ身はわな。足踏しめて欠出す。障子蹴放し懸左衛門。千枝が■取て引すへ。さ■いめ

らうめ。うぬがほたしに我大望の手筈を違へし獄卒めと。■く怒りの齒がみ。ハ、ミ兄様
そりや胴欲なむこいわいな。■折

101才

かゞみの妹を不便と思ふて給はらば謀板をやめて下さんせ、斯いふ内も心がせく。清明様
のお傍へと。又立上る妹が。鬢插で引戻し。■をぐつと貫く白刃。其手にしつかとしがみ付。
ミ妹を手にかけても。やつぱり謀板が立たいか譬此俣死る共可愛くと思ふ我恋人此世で添
ずば未来の契り。ユ、未来の望はうぬが勝手にくたばれと。めぐりくる、四苦八苦。無慙と
いふもあまり有。庭にしたぐるから紅ひ。ふしぎや忽ち逆巻水。縣左衛門屹目を付。守り詰
たるこなたに。窺ふ清明庭先へ。しづく入来る怪の修行者。今三連の金にぞくし晩秋の時な
るに一陽来復のめぐみもなく梅花の盛りを見するといふは。我同血の妹が血汐の穢に逆ま
く水。時に取ての

101ウ

金生水。日頃の大望成就なるは。夫水は元下るべき■忽地中を離れ不浄を払ふは。凶事か吉
事か。何にもせよ怪しき事を見る事じやよなと。思はず互に見合ず顔はたと。立切。一間
の障子。清明刀の目針をしめし。奥をさして欠行を。さ待たれよ左馬助と。笠脱捨れば福嶋
左衛門。扱は正則殿にも此所へ。ヲ、斯姿をかへて入込しも御劔破却を恐るゝ計。目前の奇
特によつて推量せしは其花垣と。詞に心得清助か。刀の鐙に■ば。さもかくやくたる雄龍
の劔取出せば。今迄盛りの英も一度に跡なく散失たり。正則奇意の思ひをなし。銘劔の威徳
にて盛りを見せし草木も。直に枯しはふしぎの一つ。御劔再び手に入からは。謀叛の張本則
ち

102才

討人は此正則と。上着を取ば小具足に。身を固たる正則が。遠に猛き其骨柄。さゝ三韓の賊
徒備倭將軍伯英いづれに有。左衛門正則見参くと。呼はる声に伯英が。昔にかへる其出立。
障子をさつと顛れ出。さ婢賊の奴久吉に詔りへつらふ青蠅めら。小ざかしき討手呼ばり。我
幻術の奇徳は忽ちうぬらが自滅。覚期致せと。嘲笑へば。さ兼。神孫の宝祚たる我国に敵
せんとは身の程しらぬ備倭伯英。汝が頼みの其術こそ巳の年巳の日に出生せし

某が一子市松が血汐を以てとくに汝が幻術は空しく成とは知ざるやと。聞より無念の髪逆
立。扱は金瘡の秘薬と偽り謀られしか残念。よし此上は死物狂ひ。覚期いたせといふ間も
102ウ

有せず正則が下知に随ひ数多の力者。我■りとしめいたり。多勢を相人に備倭伯
英。十横無尽に切立。一息ほつと継みたる。福嶋左衛門加藤清明欠寄て。さゝ伯英。譬い
か程働共及ばぬ腕立。降参有て永く日本の奴とならば。一命は助得させんと。仁愛厚勇者の
一言。さ降参とは穢らはし。運尽て討死の覚悟を見よやと伯英は。帯劔腹に突立れば。ヲ、
適。遠のかくご首は正則則申受ると。いふ間雷刃の光首は前にぞ落ちてけり。諸將の勇一同
に。早凱陣の声に連治る国の動なき。君は万歳壽きに。豊の竹の節込て。千代や万世つきせ
なく。五穀燦然民安全と栄ふる。末こそめでたけれ

寛政八丙辰年霜月八日